

尾小屋鉾山資料館を核とした 周辺持続活性化構想（案）

目 次

第一章 背景と目的

1	構想策定の背景	1
2	構想策定の目的	2
3	本構想の位置付け	3
4	構想策定のプロセス	5

第二章 尾小屋鉱山資料館周辺の概要

1	地域概要	7
2	各対象区域の概要	10
3	尾小屋鉱山跡周辺の地域資源の特徴	18
4	尾小屋鉱山跡周辺の地域資源の本質的価値	19

第三章 ビジョン・コンセプトと基本方針

1	持続可能な地域づくりの将来像（ビジョン）	20
2	コンセプトとターゲット	21
3	基本方針	24

第四章 整備・活用の考え方

1	尾小屋鉱山遺構全体	26
2	尾小屋鉱山資料館	28
3	メインロード	35
4	尾小屋鉄道広場 OGOYA TRAIN STATION（現第5駐車場）	39
5	カラミアート回廊	40
6	OGOYA BASE（現ポッポ汽車展示館）	42
7	関連区域	43

第五章 管理運営の考え方

1	管理運営形態	45
2	連携体制	45

3 関係人口の拡大への取り組み	46
第六章 事業スケジュール	51
おわりに	52
参考資料1 尾小屋の地質と鉱山遺構の変遷	53
参考資料2 参考事例	63

第一章 背景と目的

1 構想策定の背景

石川県小松市の山間部に位置する尾小屋町はかつて栄えた鉱山町です。明治初期から昭和にかけて、日本有数の銅の産出量を誇り、日本の近代化を支えました。

現在は、石川県立尾小屋鉱山資料館（以下「資料館」という。）をはじめ、観光坑道として旧坑道の一部を公開する尾小屋マインロード（以下「マインロード」という。）、旧尾小屋鉄道の蒸気機関車等を保管展示しているポッポ汽車展示館などの展示施設が設けられています。また未整備ながらも、製錬所の巨大な煙突や、周辺一帯に残る特徴的なカラミの遺構等の景観は、全盛期のまちの様子や人々の息づかいを今に伝えています。現状、資料館とマインロード、ポッポ汽車展示館については小松市が管理運営を行い、周辺地域のガイドや鉄道車両の保存修理、運行等は、市民団体の「NPO 法人カラミの街保存会」、「なつかしの尾小屋鉄道を守る会」がそれぞれにその役割を担っています。

さらに尾小屋町が属する西尾地区にまで視点を広げると、かつて日本各地に石材を供給した観音山をはじめとする壮大な景観スポットや市指定文化財のミズバショウ自生地がみられ、これらもまた地元の協力の下で維持・管理されています。近年では、廃校をリノベーションしたオーベルジュ、醸造所、カフェ、ベーカリーなど、市内・国内外から人が訪れる環境が生まれつつあります。

上記のように、尾小屋町及び西尾地区には価値ある資源が多く残る一方で、資料館は開館から 40 年余りが経過し、施設や設備は老朽化、マインロードは支保の落下により一部閉鎖している状況にあります。また運営を支える地域人口の減少、ボランティアの高齢化なども重なり、施設の魅力づくりと持続的な担い手の確保が課題となっています。



大倉岳側から尾小屋町を望む

2 構想策定の目的

尾小屋鉱山資料館を核とした周辺持続活性化構想（以下「構想」という。）は、資料館を核として尾小屋町及び西尾地区の地域資源を活用し、老若男女問わず楽しめる交流の場・学びの場を創造し、ひいては持続可能な地域づくりの実現に資するプランを策定することを目的としています。

前述のように、尾小屋町及び西尾地区には魅力ある資源が数多くあります。一方で、資料館をはじめとする施設の老朽化と、地域人口の減少、ボランティアの高齢化なども重なり、地域及び施設を支える担い手の持続的な確保が課題となっています。

こうした現状と課題を踏まえ、令和5年度には尾小屋鉱山資料館周辺持続活性化検討会を開催し、地元関係者との意見交換を行ったほか、県・市それぞれに資料館とマインロードについての基礎調査を実施しました。そして令和6年度は、各分野の有識者を委員とする構想策定委員会を立ち上げ、資料館を所有する石川県とともに、地域一体の構想策定に向け議論を深めてきました。

またこの地域には、尾小屋鉱山をはじめとする日本遺産「『珠玉と歩む物語』～時の流れの中で磨き上げた石の文化～」の構成資源も点在しています。この珠玉とは、日本列島の形成の歴史を語り、地域と産業の発展に深く関わってきた大地の恩恵にほかなりません。

令和6（2024）年1月1日に発生した能登半島地震では、1000年に一度という地殻変動により、一時のうちに大地が隆起する様を目の当たりにしました。それは、私たちが地球の鼓動とともに存在しているという事実、足元の大地がどのような経過を経て形成されたのかという事象の片鱗を体感し、同時に本構想策定の意義をより深くする出来事でもありました。改めていま、大地のメカニズムがもたらす恩恵とリスク、それとともに歩んできた地域の営みをとおり、自然の力と生きる知恵について学ぶべきときにあります。

地域の特性を活かした本構想は、資料館を核とする周辺地域の持続的な循環の創出、そして地球のメカニズムから小松の近・現代史まで幅広い視点において、この地域を訪れる人々の気づきや学びに寄与することを目的とするものです。



大倉岳から白山を望む

3 本構想の位置づけ

小松市のまちづくりの基本構想や行動計画にあたる「小松市都市デザイン」、「小松市 2040 年ビジョン」、「小松市ビジョン総合戦略」、また、文化財保護法に基づく石川県の施策大綱「石川県文化財保存活用大綱」があり、本市における文化財の保存・活用に関する基本計画となる「小松市文化財保存活用地域計画」の策定作業が、令和 7（2025）年 7 月認定を目指し進められています。本構想はこれらと整合・連携する地域別計画に位置づけられるものです。

また、市の各部署が策定した各種まちづくりや景観保全、観光振興、産業振興、教育、防災等の歴史文化の保存・活用に関連する分野別計画とも相互に連携を図るものとします。

特に「小松市文化財保存活用地域計画」は、文化財保護法第 183 条の 3 に定められる法定計画で、小松市における文化財の保存と活用に関する総合的な計画です。この中で、重点的に歴史文化遺産の保存と活用に取り組む「歴史文化遺産保存活用区域」として尾小屋鉱山資料館が位置する西尾地区を設定し、戦略的に地域の遺産群の保存活用の措置を講じる予定です。

さらに、小松市は「SDGs 未来都市」に選ばれており、令和 7（2025）年 3 月に策定された「第 3 期小松市 SDGs 未来都市計画」には、生涯にわたる「学び」のほかに、石の文化の日本遺産認定を契機に里山の豊かな資源を活用した交流拡大と活性化などが組み込まれています。

本構想は将来的に文化観光推進法にもとづく計画の策定をも視野に入れています。文化観光推進法は、文化の振興を起点として、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興へと再投資される好循環を創出することを目的としています。本構想はこの法の理念を共有し、その計画策定にも資するものとします。

なお、小松市のまちづくりにおける総合計画の概要は以下の通りです。

① 小松市都市デザイン（令和 6 年 9 月改訂、計画期間：2015～2040 年度）

本市におけるまちづくりの最上位計画に位置し、本市のまちづくりスローガン「小松を明るく、にぎやかに！」の下、市制 100 周年を迎える 2040 年に向かって、目標とするまちの将来像やまちづくりの考え方を示すものです。

世界に時めく日本海側の拠点都市を都市目標として掲げ、その将来像を 6 つの都市像として記載しています。

6 つの都市像

【都市像 1】世界に時めく日本海側の拠点都市こまつ

【都市像 2】ものづくりが誇りの産業創生都市こまつ

【都市像 3】子どもたちの輝く未来創造都市こまつ

【都市像 4】誰もが暮らし続けられる生涯安心のこまつ

【都市像 5】自然が映え文化が息づくふるさとこまつ

【都市像 6】ワンランク上の生活空間あふれるこまつ

この中で、都市像2として「古から受け継がれるものづくり産業と新産業が調和し、まちにさらなる活力が生まれ、持続的に発展し続ける産業都市」を掲げており、都市像3では質の高い学びの推進を掲げています。本構想の自然からの主体的な学びの提唱はこれに資するものです。都市像4では、地震や水害など激甚化・頻発化している自然災害に強いまちづくりなど、暮らしの安心感を高めることを掲げ、かつ、命を守る防災減災の観点が盛り込まれています。また、都市像5では、次世代にも残したい自然と伝えたい文化にふれ、都市像6では、自然が生み出す悠々とした時間など、快適性や幸福感を高める生活空間の形成を掲げています。

②小松市 2040 年 ビジョン（令和5年11月策定、計画期間 2023-2040 年度）

小松市都市デザインに掲げる 2040 年に目指すべきまちの姿や市政の方向性をわかりやすく伝えるため、6つの都市像を具体的にイメージ化し示したものです。

③小松市ビジョン総合戦略（令和7年1月策定、計画期間 2025～2029 年度（第3期））

地方創生、また小松市 2040 年ビジョン実現のための行動計画であり、加速し続ける少子高齢化や東京一極集中の諸課題を克服し、6つの都市像の実現に向け、5年間で集中して取り組むべき政策を定めるものです。

4 構想策定のプロセス

(1) 委員会の設置

構想の策定にあたっては「尾小屋鉱山資料館を核とした周辺持続活性化構想策定委員会」を立ちあげ、令和6(2024)年10月以降、約半年にわたって議論を重ねました。

委員については、文化観光に関わる有識者を中心に、さまざまな視点を持つ専門家に小松市内外からお集まりいただきました。また、文化庁が定める文化観光推進法に基づいた構想策定を行うことを視野に、文化庁の調査官にもオブザーバーとして参加いただきました。メンバーの氏名、所属及び役割・観点は下記のとおりです。

<委員>

(順不同、敬称略)

氏名	所属等	役割・観点
安島 博幸	立教大学名誉教授	文化観光、持続可能な地域振興の観点
朝倉 由希	公立小松大学 国際文化交流学部 国際文化交流学科准教授	文化観光、ヘリテージマネジメントの観点
山本 宗則	尾小屋鉱山資料館 元館長	石、鉱山・鉄道資源の活用 コンテンツの観点
大浦 政人	小松市西尾地区連合町内会長 (岩上町町内会 会長)	地域住民との関係性、課題の 観点
成瀬 勇輝	(株)on the trip 代表取締役	来訪者の体験価値の創造の観 点

<オブザーバー>

(順不同、敬称略)

氏名	所属等	役割・観点
竹内 寛文	文化庁 参事官(文化拠点担当) 付 文化観光支援調査官	文化観光推進法における計画 策定の観点
中尾 智行	文化庁 参事官(文化拠点担当) 付 博物館支援調査官	文化観光推進法における博物 館のあり方の観点

(2) 委員会の実施概要

委員会は3回実施し、各回テーマを設け議論を行いました。各実施概要は下記のとおりです。

1. 第一回委員会 令和6(2024)年11月6日(水) 大倉岳高原スキー場ロッジ

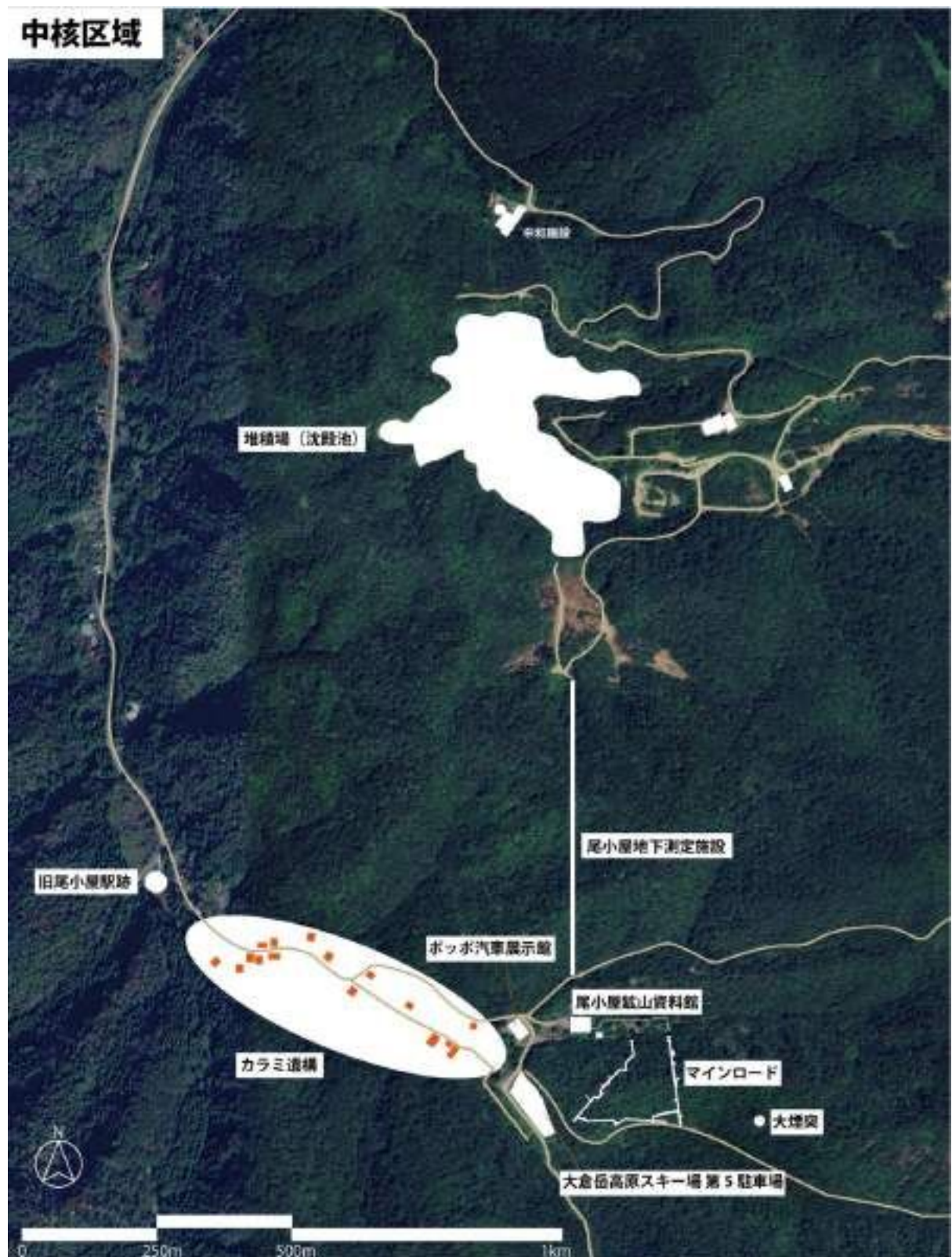
- ・ 尾小屋のコアバリューとは
- ・ 地域への誘客を目指すターゲットの検討
- ・ 尾小屋鉱山の文化資源をつなぐコンセプト
- ・ 全体ゾーニング／各施設、資源の役割、機能

2. 第二回委員会 令和7(2025)年1月22日(水) 小松市観光交流センター Komatsu 九

- ・ 全体コンセプトの検討
- ・ 具体的な実施事業案の検討
- ・ 必要機能の精査

3. 第三回委員会 令和7(2025)年3月19日(水) 小松市観光交流センター Komatsu 九

- ・ 構想案の概要説明
- ・ ターゲットと基本方針の磨き上げ
- ・ コンセプトの再検討



(2) アクセス

小松市南東部に位置する西尾地区は、郷谷川上流の山間に位置する自然豊かな地域です。郷谷川に沿って田畑が広がり、日本の原風景ともいえる美しい田園風景を今に残しています。かつては鉱山開発や石材の切り出しも盛んにおこなわれていました。主に国道 416 号線を中心として小松市中心部へのアクセスは比較的良好ですが、持続可能な公共交通への維持・見直しの中で、路線バスは令和 4（2022）年 12 月に廃止となり、当地域へのアクセスは、現在、乗合タクシーもしくは自家用車の利用が必須となっています。

(3) 人口動態

西尾地区の人口は 396 人（令和 6（2024）年 10 月）で、小松市の人口 106,341 の 0.4% です。直近 3 ヶ年では西尾地区は 11% の減少となっており、高齢化率も 46.5%（令和 2（2020）年 4 月）と比較的高く、急速に過疎化が進んでいます。また、尾小屋鉱山資料館が位置する尾小屋町の人口は現在 9 名となっており、地域住民だけでは地域づくりを支えきれない状況にあります。

(4) 観光動向

小松市全体を俯瞰してみると、令和 5（2023）年の観光客数は 971,526 人と石川県内では金沢市につぐ第 2 の目的地となっています。直近では、令和 6（2024）年 3 月に北陸新幹線が県内全線開業したほか、小松空港においても令和 5（2023）年 12 月以降、ソウル・上海・台北・香港を繋ぐ国際線の再開や増便が相次ぎ、今後の首都圏および東アジアからのインバウンド観光客の入り込み増が期待されるところです。一方、西尾地区を含む農山村エリアへ訪れる訪問客は、小松市全体の訪問客の 7.6% に留まっており、目的地としての訴求力という点ではまだまだ不十分な状況であるといえます。

2 各対象区域の概要

(1) 中核区域：尾小屋鉱山跡周辺

資料館を中心として、かつての坑道であるマインロード、旧尾小屋鉄道、カラミ遺構、沈殿池（堆積場）などの鉱山遺構が集まるエリアです（「カラミ遺構」「沈殿池（堆積場）」については12・13ページ参照）。

● 尾小屋鉱山資料館と尾小屋マインロード

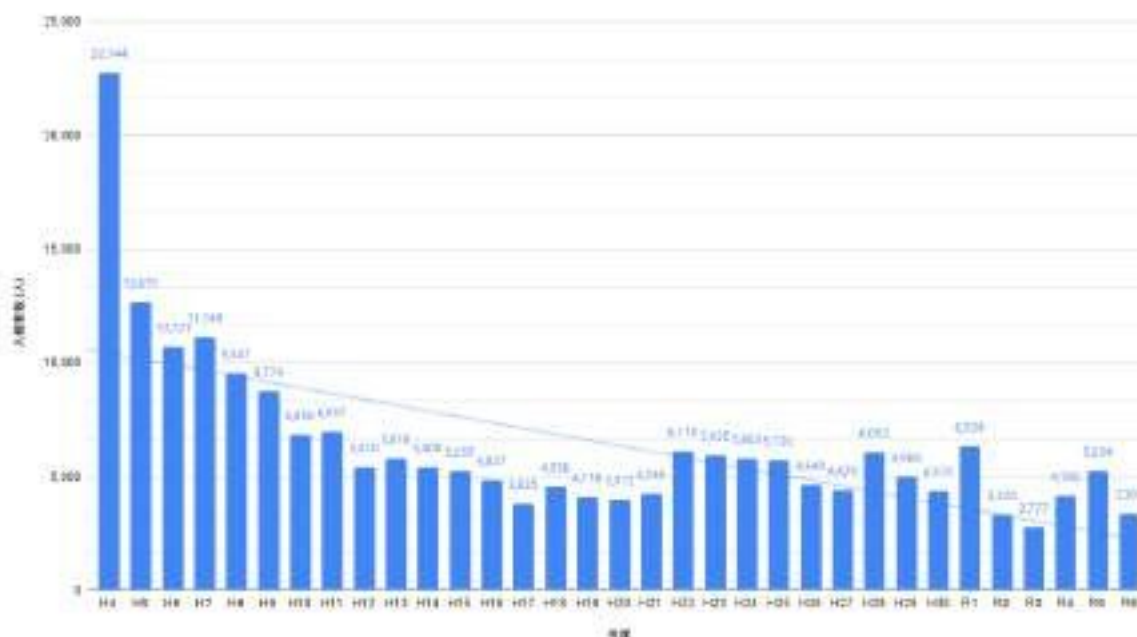
<現状>

尾小屋鉱山の歴史や鉱山産業の遺産を伝えるため、閉山から22年後の昭和59（1984）年、かつて鉱山を経営した日本鉱業株式会社はじめ関係者より多数の資料が寄せられ「石川県立尾小屋鉱山資料館」が開館しました。その後、昭和63（1988）年には、実際の鉱山坑道を活用した体験型観光施設「尾小屋マインロード」がオープンし、より臨場感のある鉱山探訪が可能となりました。これらの施設は、尾小屋鉱山の歴史を後世に伝える貴重な役割を担うとともに、地域の観光資源としての活用も期待されています。

資料館は石川県、マインロードは小松市が所有し、一体の施設として管理運営を小松市が行っています。

現在、開館期間は3月25日から11月末までです。12月1日から3月24日までの冬期は閉館しており、年間の開館日数は約210日です。

尾小屋鉱山資料館入館者数



平成4（1992）年には両施設がリニューアルされ、当時は年間2万人以上の入館者がありましたが、その後は減少傾向が続いており、令和5（2023）年には5,234人まで落ち込んでいます。

令和5（2023）年の入館者5,234人のうち、市内を含む県内観光客が75%（3,916人）を占め、県外からの流入が限定的であることが分かります。3大都市圏（首都圏・中京圏・関西圏）が13%（671人）となっており、これらを合わせると、88%が県内及び3大都市圏からの来訪となっています。

隣県からの来訪は、福井県6.9%（358人）、富山県3.2%（169人）と少数にとどまっており、北陸エリア全体での広がりには十分に確保されていない状況です。さらに、訪日外国人観光客（インバウンド）の入館者はわずか20人であり、国際的な観光資源としての活用は進んでいない状況にあります。

なお、これらの数字には小中学校団体や県民大学校などの地域学習の場として、また、大学や博物研究の場としての利用も含まれています。

また、令和5年度より年に数回「尾小屋鉱山イベントデー」と称して、ボランティアや関係者と協働し、車両、トロッキの動態展示や、「カラミの街見学会」を開催しており、県内外からの来訪があります。

<課題>

- ・小中学校等の学習や体験活動を始めとする教育文化施設としての機能向上とともに、大学等の研究施設としての受入れ対応
- ・トイレ利用や施設における活動に必要な水道施設の確保
- ・ターゲットを絞った情報発信や海外からの観光客増加に向けた多言語対応
- ・施設機能の充実による利用者層や利用者数の拡大とともに、持続的な施設運営に係る入館料のあり方
- ・ボランティアの確保・育成や地域との連携とともに、活動における休憩場所の確保



尾小屋鉱山資料館



尾小屋マインロード

● 尾小屋鉱山遺構（大煙突、旧坑道、カラミ遺構、沈殿池（堆積場）、鉱山事務所跡）

<概要>

尾小屋鉱山は総延長約 160km にも及ぶ坑道網を有し、製錬所や選鉱場、鉱山住宅などの付帯施設が整備された一大鉱山地帯でした。しかし、閉山時に坑道の多くは埋没処理が施され、製錬所や選鉱場、鉱山住宅なども撤去されました。今は大きな煙突が山の木々の間に姿を残しています。

尾小屋鉱山の敷地一帯は散策道「尾小屋プロムナード」として整備され、大倉岳への登山コースとしても活用されています。鉱山施設の多くは消滅しましたが、現在でも旧坑道を利用した施設や尾小屋町一帯の景観に、大規模鉱山地帯であった名残を見出すことができます。

1. 大煙突、旧坑道

<現状>

尾小屋マインロードとして利用されているほか、一部の坑道を除き、そのほとんどは閉じられ、操業時の様子をしのぶことはできません。林道を行くと青々とした山並みの中に忽然と現れる大煙突が、当時の雄姿を見せています。



大煙突

<課題>

- ・大煙突を見学できるルートの設定
- ・かつての鉱山の景観をイメージさせる仕掛け

2. カラミ遺構

<現状>

銅の製錬過程で副産物として生じる「カラミ」を尾小屋鉱山では、明治 40（1907）年頃には「カラミ煉瓦」として活用していたとの記録があります。

カラミ煉瓦は、鉱山施設の建築資材だけでなく、住民の家の基礎、塀、道路の縁石、墓石などにも使用され、尾小屋ならではの景観を形作る要素となりました。しかし、閉山後、まちを去る人が増え、カラミを用いた建物の多くは時代とともに解体され、姿を消していきました。

現在は一部のカラミ遺構が残されており、近年では NPO 法人「カラミの街保存会」が発足し、カラミ煉瓦や擁壁を「カラミの街」として保存・活用する取り組みが進んでいます。特に、尾小屋で見られる六角形のカラミ煉瓦は、世界的にも珍しい形状であり、地域の産業遺産として高い価値を持っています。

<課題>

- ・カラミ遺構の分布調査や保存状態等の記録、カラミに関する文献資料等の調査
- ・かつての尾小屋のまちなみとにぎわいを伝える仕掛け



馬車道沿いのカラミ擁壁



六角形カラミ

3. 沈殿池（堆積場）と坑廃水の浄化

<現状>

尾小屋鉱山の閉山後も、坑道から流出する坑廃水の処理は必要不可欠となっています。このため、「赤目坑水処理場」および「倉谷坑水処理場」が設置され、金属鉱業等鉱害対策特別措置法に基づく指定鉱害防止事業機関が坑廃水の浄化業務を実施しています。これにより、尾小屋鉱山から流出する水は排水基準に適合した水へと処理され、郷谷川へ放流されています。長い時間をかけて地域環境の浄化が進められ周囲には美しい景観が戻ってきています。こうした継続的な取り組みは、私たちが抱える今日的な課題への大きな示唆に富んでいます。

なお、一般の立ち入りは禁止されており、公開もされていません。



かつての沈殿池

<課題>

- ・非公開施設であるが、継続的な環境保全への取り組みを学び伝える仕組み

4. 旧坑道を活用した微弱放射能測定所

<現状>

尾小屋鉱山の旧坑道は、科学研究の場としても活用されています。

その代表例が、「金沢大学環日本海域環境研究センター尾小屋地下実験室」です。この施設では、世界トップクラスの微弱放射能測定が行われています。

旧坑道内の岩石には自然放射線量が比較的低いという特性があり、測定環境として最適な条件が整っています。さらに、金沢城に使用されていた鉛瓦を遮蔽材として利用することで、より精度の高い放射能測定が可能となっています。この施設は、環境科学や地球物理学の研究拠点として国際的にも注目を集めています。

なお、通常は一般に公開されていません。

<課題>

- ・旧坑道のさまざまな利活用の検討

5. 鉱山事務所跡（現・大倉岳高原スキー場 第5駐車場）

<現状>

かつて尾小屋鉱山の管理拠点であった鉱山事務所の跡地は、現在、スキー場の駐車場として利用されています。

操業当時の写真から、当時の事務所が鉱山の運営を支えた施設としてその威容を誇っていたことがうかがえます。

<課題>

- ・スキーズーンの駐車場利用に加え、グリーンシーズンにおける活用



鉱山事務所

● 尾小屋鉄道遺構



倉谷隧道へ入る5号蒸気機

<概要>

尾小屋鉄道は、鉱山資源の輸送を目的として大正8（1919）年に開業。小松駅の南にあった「新小松駅」から山間部の「尾小屋駅」までの16.8kmを結ぶ路線でした。開通当初は貨物輸送が中心だったものの、次第に鉱山関係者やその家族、地元住民の足としても利用されるようになり、旅客営業が開始されました。地域にとって欠かせない交通手段として、最盛期の昭和



尾小屋駅 臨時列車増発時の様子
昭和51（1976）年10月

和36（1961）年には、年間旅客数113

万人を記録しています。しかし、鉱山の衰退とともに鉄道の役割も縮小し、昭和52（1977）年に尾小屋鉄道は廃止されました。

<現状>

尾小屋鉄道に関連する車両や鉄道遺産が各所に残っています。

ポッポ汽車展示館は当時の鉄道車両の保管庫としてつくられた施設です。昭和 39（1964）年に遠州鉄道より譲渡され尾小屋鉄道で活躍した気動車（ディーゼルカー）のキハ 3 と 5 号蒸気機関車、ハフ 1 客車が保存されています。これら車両の動態展示のほかトロッコの乗車体験も行われています。

なお、尾小屋鉄道が昭和 13（1938）年に製造発注した日立製作所笠戸工場製の気動車のキハ 2 は、映画『男はつらいよ 柴又慕情』（昭和 47（1972）年公開）に営業当時の金平駅とともに登場した車両です。廃線後所有してきた団体が現在譲渡先を探しています。

尾小屋駅跡地には、ホームと転車台が残っています。塩原駅舎も塩原バス停として現存しています。



ミニチュアキットにもなった塩原駅舎

なお、「いしかわ子ども交流センター小松館」（小松市符津町）では、「なかよし鉄道」として、尾小屋鉄道で活躍した気動車のキハ 1 などが動態保存され、イベント時には乗車体験も可能です。今後も整備運営にあたり連携が必要とされます。

<課題>

- ・車両やトロッコの動態保存に係る施設や運行に必要な常設レール等の充実・更新。
- ・ボランティアによる修繕や休憩場所等の確保及び雪囲い等維持管理の容易性の確保
- ・地盤が安定し、より広い敷地への移設の検討
- ・キハ 2 の保全と活用
- ・「ポッポ汽車展示館」について尾小屋鉄道を連想させる名称のあり方



ポッポ汽車展示館（キハ 3）



トロッコ運行中

（２）関連区域：西尾地区

尾小屋をとりまく里山や石切り場、農家レストラン、自然散策ルートなど、尾小屋鉱山の学びを補完する多彩な資源が点在しています。訪問客がより長時間楽しめる周遊プログラムを構築し、西尾地区の宿泊拠点や季節イベントとも連動して滞在型観光をねらいます。

● 大倉岳高原（スキー場・登山道）

<現状>

昭和 41（1966）年にオープンした大倉岳高原スキー場は現在、（公財）小松市まちづくり市民財団が管理運営を行っています。グリーンシーズンには、西尾地区連合町内会の主催による大倉岳高原まつりや、民間団体によるトレイルランナーズカップ石川大倉岳、パラグライダースクールなどが開催されています。

大倉岳は、地元の有志による大倉岳観光協会をはじめボランティア約 20～30 人が登山道整備や補修を行っており、通年、登山愛好家の姿が多く見られます。

<課題>

・持続的に利用者を取り込んでいくうえで、アウトドア利用者向けの休憩所・インフォメーション・トイレなどの提供



営業中のスキー場



スキー場（夜景）

● 西尾八景

<現状>

古くから人々に愛されてきた豊かな自然と文化が調和した美しい景勝地「西尾八景」は、8つの景勝地（十二ヶ滝、象岩、観音山、烏帽子岩、鱒留の滝、鷹落山、大滝、大倉岳）で構成されます。それぞれの景勝地は個性的な魅力を放ち、訪れる者を魅了しています。特に西尾地区の入口に位置する「十二ヶ滝」は、春は桜、初夏には鯉のぼりが泳ぐ景観を提供し、夏には多くの家族連れが川遊びに訪れにぎわいます。



夏の十二ヶ滝

<課題>

・一体的かつターゲットを絞った情報発信

● オーベルジュ・醸造所 等周辺施設

<現状>

郷谷川支流流域とその自然環境を利用した施設として、小学校を改修したオーベルジュ「eafeu(オーフ)」や日本酒醸造の「農口尚彦研究所」など、近年、新たな目的地が生まれています。また、西尾地区から少し離れた大杉谷川沿いにはパン屋やカフェといった自然の中での暮らしやリラックスしたカフェ文化を体現するような場が生まれ、マルシェ等を独自に開催し、市内外からの訪問者を惹きつけています。

<課題>

- ・距離的に近い資料館や他の西尾地区の観光資源との回遊性の創出

(3) 広域関連区域：小松の石文化

<現状>

日本遺産「『珠玉と歩む物語』～時の流れの中で磨き上げた石の文化～」に代表される「石の文化」は、小松市域の長い歴史を語るうえで欠かせないキーワードです。参考資料1で述べるように、小松の大地は地球のダイナミズムの中で形成されていきました。そしてその恩恵のもと、ものづくりが盛んにおこなわれてきました。近代に入ると鉱物資源が採掘され、地域の産業を牽引しました。隣接する遊泉寺鉱山も尾小屋と同じ鉱脈の系譜をたどる鉱山です。ここで使用されていた鉱山機械の修理部門を起源とする会社が、現在の株式会社

小松製作所（コマツ）です。石とともに発展してきた暮らし、そしてものづくりのDNAは、今なお脈々と受け継がれています。

これらの「石の文化」は現在、小松駅高架下の「小松市観光交流センター Komatsu 九」内のギャラリーで八日市地方遺跡出土品などと合わせて紹介されています。また同じく小松駅近隣には「こまつの杜」があり、株式会社小松製作所の歴史を学ぶことができます。



超大型ダンプトラック“930E”
(小松駅東口隣接の「こまつの杜」)

<課題>

- ・「小松の石文化」の魅力を発信するゲートウェイとしての Komatsu 九のギャラリーにおける展示や情報発信の工夫・改善
- ・駅周辺と尾小屋地域を結ぶ観光交通のあり方

3 尾小屋鉱山跡周辺の地域資源の特徴

（１）自然資源 — 地球の営みが生んだ“ジオヒストリー”

尾小屋鉱山跡周辺には、46 億年にわたる地球の壮大な営みが刻まれています。約 2,500 万年前、活発な海底火山活動によってこの地の形成が始まり、火山灰の堆積や大陸の分離など、多様な地殻変動を経て、豊富な鉱物、鉱床が生まれました。こうした長い地球活動の蓄積によって、銅や鉛、亜鉛など人類にとって“宝の山”とも呼べるほど魅力的な鉱物資源が育まれ、文明の発展を側面から支えてきました。

さらに、鉱山の閉山後には、自然が再び勢いを取り戻し、緑豊かな景観へと変化しました。遺構の隙間から木々が生い茂り、鉱山跡地が次第に自然へと還りつつある様子は、時間の流れとともに変容する“生きたジオヒストリー”を体感させてくれます。この地に足を踏み入れると、数千万年の地球の息吹を直に感じることができます。

（２）文化資源 — 鉱山開発の歴史を今に伝える数々の遺構

その“宝の山”を活用するため、人類は長年にわたりさまざまな知恵と技術を生み出してきました。採掘から製錬に至るまでの革新的な技術が培われ、マインロードや沈殿池（堆積場）、カラミ煉瓦のまちなみなど、鉱山開発の歴史を今に伝える数々の遺構が残されています。鉱石を積んだトラックが行き交い、多くの労働者が汗を流したその時代の空気感は、静寂の中に今なお漂い、訪れる人々の想像力をかき立てます。

鉱山の閉山後には多くの人々が去り、施設の数々は次第に朽ちていきました。かつての活気に満ちた労働の場は、今では自然と人工物の対比が際立つ独特の景観を生み出しています。それは、技術の発展と衰退、人類のいとなみのはかなさの象徴であり、歴史を学ぶだけでなく、深い思索へと誘う場所にもなっています。

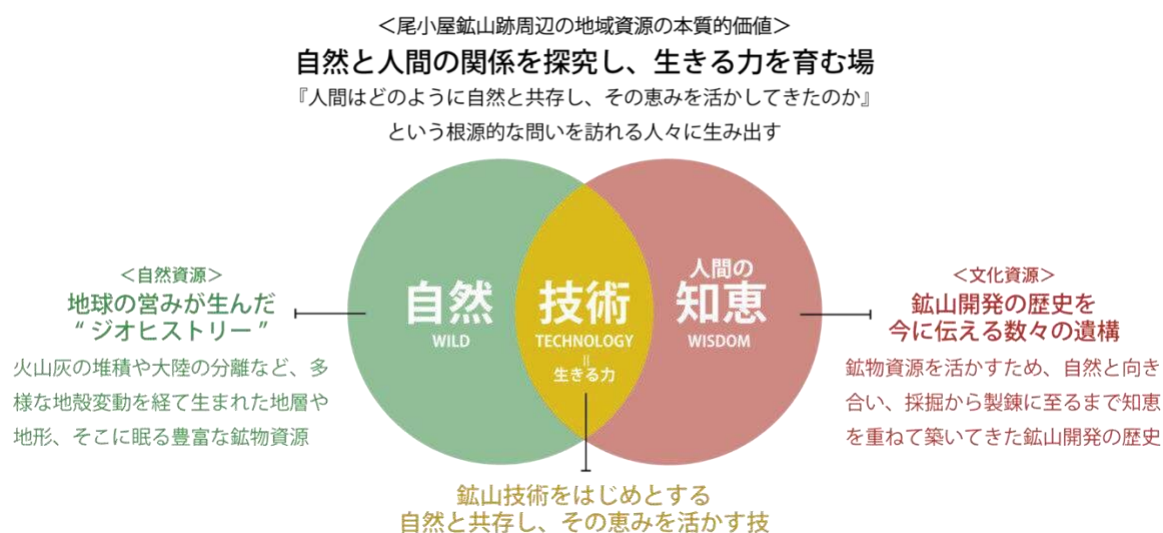
4 尾小屋鉱山跡周辺の地域資源の本質的価値

尾小屋鉱山跡周辺の本質的価値は、地球の営みが生んだ壮大な自然資源と、人間の知恵と技術が生み出した歴史遺産がコンパクトに同じ場所で重なり合うことにより、訪れる人々に「人類はどのように自然と共存し、その恵みを活かしてきたのか」という根源的な問いを生み出す点にあります。

この地には、荒々しい地形や壮大なスケール感、そして時を経て朽ちゆく遺構が共存し、訪れる人々に強烈な印象を与えます。自然の圧倒的な力を前にした畏怖と未知への探求心を呼び覚ますと同時に、過酷な環境下で築かれた鉱山技術は「生きる力」の本質を問いかけます。さらに、鉱石を活かす技術や遺構に刻まれた歴史に触れることで、人間が自然といかに向き合い、共存し、知恵を絞って活用してきたのかを実感する場ともなります。

尾小屋は、単なる産業遺産の地ではなく、『**自然と人間の間を探究し、生きる力を育む場**』であり、私たちに自然との向き合い方を問いかける貴重なフィールドといえます。

(尾小屋鉱山の地質と鉱山遺構の変遷の詳細については、参考資料1 (P54~63) を参照)



第三章 ビジョン・コンセプトと基本方針

1 持続可能な地域づくりの将来像（ビジョン）

資料館を核とした尾小屋鉱山跡周辺の整備により、下記の持続可能な地域づくりの将来像を描きます。

①新たな訪問価値の創出による地域活性化

- ・ 鉱山遺構や自然環境を観光資源化し、交流人口の増加と雇用の創出を促進。
- ・ 近隣の観光地や宿泊施設との連携により、広域的な周遊促進と滞在時間の延長が期待される。

②地域を支える関係人口の拡大

- ・ 地域内外の人々が継続的に関われる仕組みづくりで、多様な担い手を呼び込み、地域支援基盤を拡充。
- ・ 企業・大学などの連携により、新しい知見や技術が流入し、多様な活動が展開される。

③市民の学習機会の拡充

- ・ 歴史・文化・防災・環境といった多様な学びの場が広がり、幅広い世代の教育機会が向上する。
- ・ 地域住民の歴史や文化への理解が深まり、地域への誇りと愛着が醸成される。

④環境保全への貢献

- ・ 鉱山跡地の活用や持続可能な観光を通じ、自然環境の保全が進む。
- ・ エコツーリズムや環境教育により、訪問者の意識向上と次世代への関心拡大を図る。

2 コンセプトとターゲット

(1) コンセプト

尾小屋鉱山跡周辺が持つ貴重な地域資源を最大限に活かし、持続可能な地域活性化の拠点とするため、以下のコンセプトを掲げます。

『 自然を未来に生きる力へ変えるマインパーク

― 時の鼓動を感じる「技術」と「冒険」の地 OGOYA 』

尾小屋は、幾億年もの地球の営みの歴史と、鉱石のロマンに魅せられ情熱を燃やした先人たちの記憶が刻まれた地。尾小屋の鉱物や遺構は、その地に刻まれた歴史や記憶の鼓動を私たちに感じさせます。

そしてカラミに象徴されるセピアブラックの情景は、鉱山の歴史が刻んだモノクロームの濃淡と、長い年月が醸し出す「さび」にも似た静かな美しさ、さらに黒く力強い産業の痕跡が重なり合う、この地固有の雰囲気そのものです。

この貴重な地域遺産を未来へ繋ぐため、この地を「自然を未来に生きる力へ変えるマインパーク ― 時の鼓動を感じる「技術」と「冒険」の地 OGOYA」へと進化させます。

その中で重要なキーワードは「技術」と「冒険」です。

「技術」とは、単なる機械や仕組みではなく、自然と向き合い、その力を活かしながら困難を乗り越え、人の暮らしに役立ててきた先人たちの知恵であり、「生きる力」そのものです。

「冒険」とは、教科書から学ぶだけでなく、自らの足で探索し、手で触れ、五感で探求し、時には試行錯誤しながら先人の記憶を掘り起こす体験です。坑道の暗闇、岩肌の感触、カラミ煉瓦の街並みなど、過去の物語を纏う尾小屋のセピアブラックの情景すべてが、学びのフィールドです。

尾小屋に響く鼓動に耳を澄ませ、大地に残された痕跡から先人の知恵（技術）を発見し、自ら試し、考える。尾小屋での体験は、過去の記憶から未来を拓く力を育む、時空を超えた冒険です。

（２）ターゲットイメージ

コンセプト及び体験設計のテーマから、ターゲットイメージを下記の通り想定し、それらのターゲットに対する新たな訪問価値を生み出すことを目指します。

①ファミリー層（親子連れ）

対象：30～40代の親と小学生～中学生の子ども

来訪動機：市外・県外からの車の利用がメイン。日帰りまたは1泊2日の小旅行を好む。北陸旅行の一環として訪れるケースが多く、福井県立恐竜博物館などとの周遊を検討。

<ニーズ>

- ・休日に家族で楽しめるワクワク感のある体験を求めている。
- ・レジャーで楽しみながら、子どもの学びにつながるエデュテインメント（学習要素と娯楽要素を組み合わせたコンテンツ）を重視。
- ・科学・自然・歴史を体験的に学べるコンテンツ（鉱石発掘、坑道探検、実験型アクティビティ）に興味。
- ・移動・施設の利便性（駐車場、アクセスしやすい遊歩道、休憩スペース）が整っていることが望ましい。

②アウトドア&冒険志向の若年層

対象：10～30代中心（子ども～若年社会人含む）

来訪動機：都市圏から週末のアウトドアアクティビティを求める。キャンプやハイキングと組み合わせて訪問。SNS映えするアクション要素を重視。

<ニーズ>

- ・自然環境をアクティブに楽しめる冒険感のある体験を求めている。
- ・身体を動かすアクティビティへの関心が高い。
- ・SNSで映えるダイナミックな景観や、非日常感のある体験に惹かれる。

③アート・サステナブルへの感度の高い旅行者

対象：20～50代中心。国内外問わず、SNSや雑誌、アート系情報に敏感な層。

来訪動機：産業遺産や地域文化に関心が高く、「歴史を再解釈するアートやデザイン」に価値を感じる。移動手段は車または公共交通＋レンタカー。

<ニーズ>

- ・産業遺産を活かしたアート・建築・デザイン要素に興味がある。
- ・「過去・現在・未来」をつなぐインスタレーション（音・光・プロジェクションマッピング等、場所や空間全体を作品として体験させる芸術）やアート作品があると魅力的。
- ・廃材や地域資源を活かしたクラフト・ワークショップ（鉱石を使ったアクセサリ制作、カラミ煉瓦の再利用プロジェクト）を体験したい。

- ・ サステナブルな食・宿泊体験がセットであるとより満足度が高まる。
- ・ 環境問題や文化的ストーリーを学びながら、地域と関わりを感じる体験を重視。

④学校・教育機関（小中高・大学・専門学校）

対象　：地元小松市や県内外の小中高の遠足・校外学習、大学・専門学校（地質学・環境学・観光学など）のフィールドワーク。団体バスで訪問。

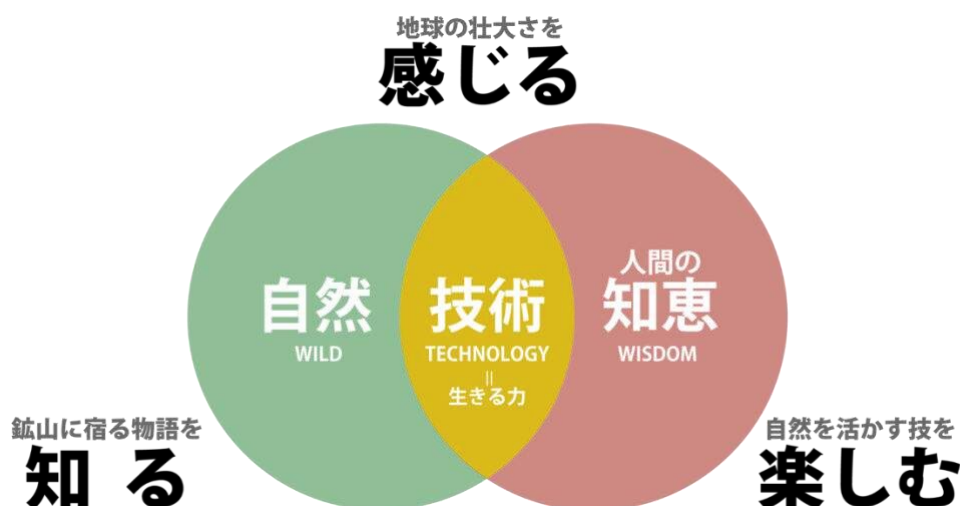
<ニーズ>

- ・ 教育カリキュラムと連携可能なプログラム（地質学、鉱山史、防災・環境学習）が必要。
- ・ フィールドワークとしての価値（鉱石採取・分析、坑道調査、環境問題への学び）があることが重要。
- ・ 専門家の解説・講座付き体験（ワークシートの提供、学習指導要領との適合性）があると、学校側にとって導入しやすい。
- ・ 大学や研究機関との連携による特別プログラム（地質調査、環境研究、地域資源活用プロジェクト）が展開できる場としてのポテンシャルを求める。

3 基本方針

(1) 基本方針

『自然を未来の生きる力へ変えるマインパーク ― 時の鼓動を感じる「技術」と「冒険」の地 OGOYA』をコンセプトとして、自然と人間が織りなす壮大なドラマを感じる・知る・楽しむの3つの視点で、資料館を核として尾小屋鉱山跡周辺の整備をおこないます。



【感じる視点】地球の壮大さを"感じる"

尾小屋鉱山跡周辺は、海底火山や大陸の分離などによって育まれた“ジオヒストリー”の壮大さを背景に持ち、雄大な山麓や里山、そして遠く日本海まで見渡せる地形が訪れた人々を包み込みます。ここでは、日常からは得られないスケールを五感で体感し、自然と人間の関係性を再考する場を生み出します。整備の中心となる資料館については、映像や模型等を活用し、地球の誕生から尾小屋鉱山の成り立ちを感覚的に理解できる空間の整備などを想定しています。

【知る視点】鉱山に宿る物語を"知る"

尾小屋鉱山の馬車道やカラミ遺構、マインロードなどは、一見すると“人々が去り、時の止まった遺構”のように映ります。しかし、かつて人々は過酷な山間で銅の採掘・製錬を行い、多様な技術革新と工夫を凝らしていました。これらの遺構がもつストーリーを再現し、「ここで何が起ったのか」その発展と苦闘の足跡を訪問者が深く理解できるようにします。資料館については、尾小屋における鉱山開発の歴史や鉱物資源の活用技術などが、資料展示や映像解説等を通じて理解できるよう整備することを想定しています。

【楽しむ視点】自然を活かす技を"楽しむ"

雄大な自然と想像をかきたてる遺構空間とが交錯する尾小屋鉱山跡周辺は、本能的な“生き抜く力”を鍛えるうえで最適なフィールドです。自然界に鉱物資源を見だし、「生きる力」へと変えることで文明を築いてきた先人の営みを実際に体を使って追体験し、「自身の知恵と工夫で困難を突破する」楽しさを感じてもらうとともに、自然と向き合う科学の本質にせまります。資料館においては、鉱物などの自然の資源を活かしてきた先人たちの技術を追体験できるスペース等の整備を想定しています。

（２）現代社会が求める学びの場

現代は、気候変動による自然災害や資源枯渇など、地球規模の課題が深刻化しています。これらの課題に対処してゆくためには、知識を糧として実践し、自然と共生する力が不可欠です。

尾小屋鉱山跡周辺は、下記の要素を全て兼ね備え、そうした力をはぐくむために現代社会が求める学びと体験を提供する、理想的な場所といえます。

- **自然の力強さと恵みを体感できる場**
- **鉱山開発の歴史から、資源活用の知恵を学べる場**
- **自然を活かし「生きる力」へと変える技術を実践できる場**

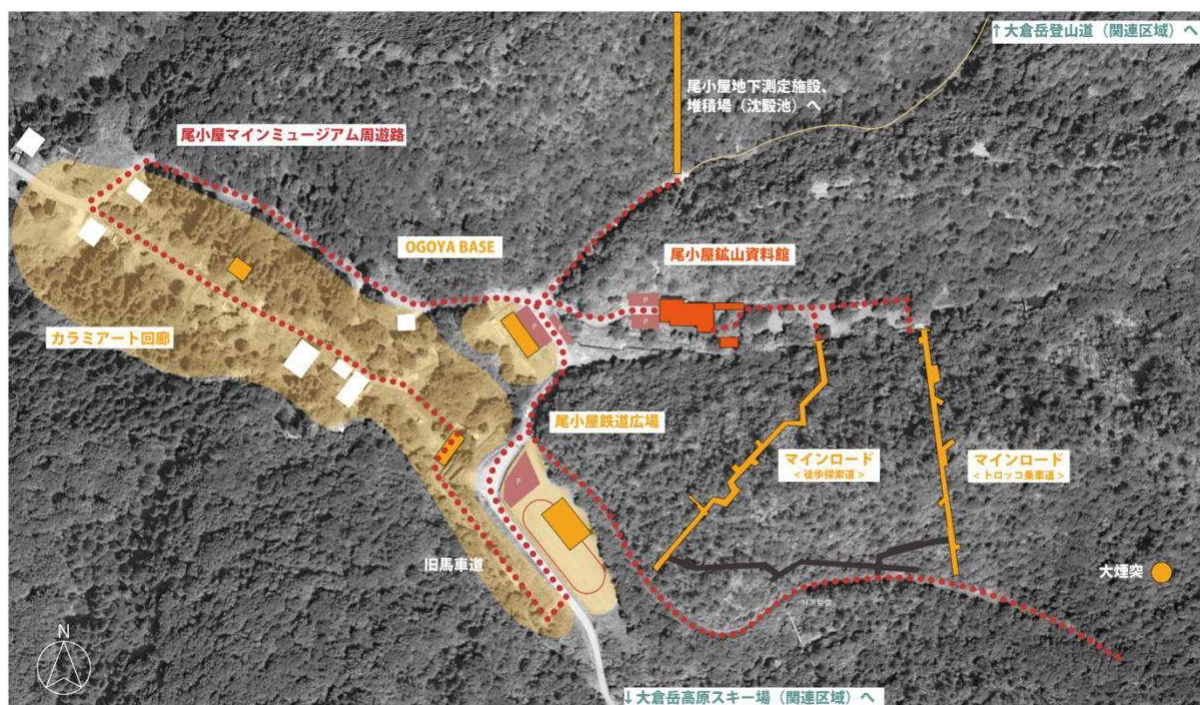
第四章 整備・活用の考え方

資料館を核とした尾小屋鉱山跡周辺を「（仮称）尾小屋マインパーク」として、一体的な整備エリアに位置づけします。現段階で想定される取り組みやアイデアを以下に提示しました。今後、優先的に進める取り組みや実現性について、関係機関やボランティア団体との協議や市内の文化施設等との役割・機能分担のもと、具体的な事業内容やその実施主体について検討を行います。検討にあたっては、民間事業者とのサウンディング型市場調査による民間活力の導入の可能性の把握や事業スキーム、費用対効果等の検討を行い、持続的な運営が可能な計画として取りまとめていく予定です。

1 尾小屋鉱山遺構全体

● 「（仮称）尾小屋マインパーク」の一体的な整備

資料館を核とした尾小屋鉱山跡周辺を「（仮称）尾小屋マインパーク」として一体的に整備します。



尾小屋マインパーク全体イメージ

01 遺構群をつなぐ周遊アクセスルートの整備

鉱山遺構（マインロード、大煙突、カラミのまちなみなど）を結ぶ回遊経路を確保し、安全な移動を確保。鉱山遺構をめぐる回遊路において、勾配の大きい箇所や危険箇所には階段やスロープを追加。馬車道からカラミのまちなみへ至る経路には、新たに橋を架設し、回遊ルートの選択枝を拡大。

02 ビューポイントと休憩設備の設置	各遺構の特性を活かした見学デッキや展望台を設置し、景観を最大限に楽しめるように配慮。遊歩道の適切な場所に休憩スポット（ベンチなど）を設け、来訪者の利便性を向上。
03 鉾山まち案内（解説パネル）の設置	各遺構やカラミ煉瓦壁面に簡易の保護処置を施しつつ、控えめなデザインで解説パネルを適切な高さに設置。パネルには QR コードを付け、詳細情報や写真や図面、動画や AR コンテンツなどを用いてアクセスできるようにする。
04 鉾山遺構 AR/オーディオガイド	鉾山遺構の現地でスマホアプリや AR ゴーグルを活用し、過去写真と現在の風景を重ね合わせる“タイムスリップ”体験を提供。音声ガイドを導入し、“ここで何が行われ、どんな技術的課題や工夫があったのか”をストーリー形式で学ぶ。多言語対応し、外国人観光客も楽しめるようにする。
05 駐車場・乗降場所の整備	身障者をはじめ坂道の上下りが困難な来訪者に配慮した安全な駐車スペースや乗降場所を検討する。大型バスでの来訪にも対応し、身障者などを含む団体の受け入れがスムーズにできるようにする。

2 尾小屋鉱山資料館

【位置づけ】冒険への知的好奇心を刺激するプロローグ

これから始まる「冒険」への導入部として、情報提供に留まらず、映像や展示を通じて鉱山の壮大さ、先人たちの挑戦、地質学的な背景をドラマチックに伝え、来訪者の知的好奇心と探求心を最大限に引き出します。ここで得た知識が、後の坑道探検や遺構巡りでの発見や感動を深めるための「地図」となります。

【基本的な整備事項】

● 基礎的な改修整備—誰もが安心して利用できる資料館へ

上水道の確保と同時に、老朽化した資料館をメンテナンスが容易、かつ災害にも強い施設へと改修する。年齢や障がいの有無に関わらず、だれもが快適に利用できる施設を目指します。



イメージパース

06 資料館の防災機能向上	建物の基礎・外壁の劣化診断に基づき、必要な補修・補強（耐震・断熱強化を含む）を実施。地域基準に適合する積雪対策として、屋根の耐荷重強化、適切な勾配設定、雪止めの設置など、必要に応じた構造補強を行う。 また、停電や災害発生時に備え、非常用自家発電機および蓄電池システムを導入。坑道内やマインロードでのイベント実施時にも、安定した電源供給を可能にする。
07 上水道の確保	資料館の上水道については、現状では、手洗いなどには大倉岳からの井戸水、トイレには近隣の河川の水を使用している。尾小屋町内にまで引かれている簡易水道を資料館まで引き込むことで、必要な上水道を確保する。
08 バリアフリー化改修	資料館には小規模エレベーターまたは昇降機を設置。 マインロード方向への動線には、2階デッキから傾斜を抑えたスロープを整備し、車椅子・ベビーカーでの移動を容易にする。 あわせて、トイレなどのアメニティを向上する。

● 学習・研究拠点としての整備—資源と環境を考える場の創出



イメージパース

学びの拠点として整備し、教育機関・研究者・一般市民が交流しながら資源や環境について考える場を創出します。歴史的な産業遺構を活かしつつ、最新の研究成果や未来の資源循環について学ぶことで、持続可能な社会実現に向けた意識を高めることを目指します。

09 レクチャールーム	学校・教育機関から誘客ができるよう、団体を一度に収容できる多目的スペースを確保し、プロジェクター・音響設備などを備えたレクチャールームを新設。椅子や机を可動式にしてワークショップ・講演会・セミナーなど多様な用途に対応できるほか、通常時はライブラリースペースとしても利用。
10 最新研究紹介ブース	金沢大学による微弱放射能測定など最先端の研究を紹介するブースを研究ラボ風のインテリアで設置。現在おこなわれている鉱山管理・環境対策の状況も簡易モニタースタンドやパネルで紹介。
11 未来の資源循環プログラム	資源循環や環境問題について考える機会として、セミナーやワークショップを実施。例えば、産業遺構と循環型社会の関連性や、カラミ再利用の先駆的事例を紹介し、専門家を招いたセミナーを行う。産業遺構がいま考えるべき環境・資源問題の啓発拠点になるように、一般市民や企業、学生を巻き込む。

【感じる視点】地球の壮大さを感じる

● ダイナミックかつ深遠なる地球の営みを体感する—ジオヒストリーを学ぶ展示と体験



イメージパース

尾小屋にみられる地形や鉱床は、海底火山の噴火、火山灰の堆積、大陸の移動、日本列島の形成といったダイナミックな地球の営みの証です。訪問者が、この壮大なスケールを視覚・触覚・聴覚など多方面から体感できるようにし、日常では意識しない“地球の深遠なる時間”を味わえる環境を提供します。例えば、映像や立体模型を活用し、地球の誕生から尾小屋鉱山の成り立ちを感覚的に理解できる空間を整備することで、「この土地がいかに長い時間をかけて形成されてきたのか」を知る場とします。

12 ジオヒストリーシアターの設置	資料館の入口付近に、海底火山や大陸分離などの地球史を映像で体感できる「ジオヒストリーシアター」を設置。シアター付近に、グリーンタフの実物断面や地質ブロックを展示する地質展示を整備し、立体物を通じて直感的に把握できる仕組みをつくる。
13 ジオヒストリー周遊プログラム	ガイドブックを受け取り、資料館を出発点として大倉岳や観音下の石切場などを巡りながら、岩石や鉱物の特徴を学ぶ周遊プログラムを提供。希望者は周遊途中で小型の石を少しずつ集め、最後に資料館内で洗浄・ラベリングをして鉱物標本を作る体験も用意する。

● 石の“内なる美”を見せる—鉱物の魅力を発見する体験型展示



イメージバース

石や鉱物は単なる採掘資源ではなく、地球が作り出した芸術作品でもあります。石の切断や研磨を通じて、外観からは想像できない内側の輝きや結晶構造を発見できる体験を提供し、石や鉱物がもつ独特の魅力を引き出します。拡大鏡や、偏光顕微鏡を使い、鉱物が虹色に輝く様子を観察したり、透過光を使ったライトアップ展示を設けたりすることで、「隠された美しさ」を可視化し、訪問者に自然の神秘を伝えます。

14 鉱物ライトアップ展示	鉱物の美しさを見せるコーナーを設置。鉱物標本を展示ケースで並べ魅力的に見せる。暗幕やスポット照明、透過照明等を用い、結晶の輝きや色合いを際立たせる空間、展示演出をおこなう。
15 AR 鉱物図鑑	ライトアップ展示ケースの前でスマホをかざすと、AR で元素組成や歴史的エピソードが浮かび上がる仕掛けを導入。自分の観察データや写真を共有できるオンラインプラットフォームと連動し、来館者同士の交流と学びを促進する。
16 鉱物観察&加工ラボの設置	石の裁断機や偏光顕微鏡を配置したラボを設置。研磨や裁断した石の顕微鏡による観察体験、撮影などができる。ワークショップスペースとしても共用可能なものを想定する。
17 わたしだけの鉱物標本づくりプログラム	資料館内の鉱物ラボでのワークショップスペースとして、来館者が小さな石を研磨し、顕微鏡で結晶面を観察できるプログラムを定期実施。シリアル番号やシールを貼って持ち帰れるため、オリジナル標本として愛着を持ってもらう。

【知る視点】 鉱山に宿る物語を知る

● 資料館が保有する資料の有効活用—歴史を伝え、貴重な資料を未来へ



イメージパース

資料館が所蔵する貴重な資料は、適切に保存しながら、より多くの人々に活用されることで、その価値が最大限に発揮されます。資料の長期保存と活用が両立する環境整備を進め、歴史や文化をより深く理解し、次世代へ継承するための環境を整備します。

18 収蔵庫の設置	湿度・温度管理が可能な収蔵施設を整備し、鉱山関連の重要資料・文献・写真・鉱物サンプルなどを適切に保存。防火・防水対策を強化し、長期にわたって文化財的資料を安全に保管できるようにする。
19 リアル再現展示	資料館が所有する資料の有効利用として、鉱山労働者の生活再現として当時の生活用具や写真、証言などを展示し、鉱山労働者の暮らしぶりをリアルに再現したコーナーを設置する。
20 アーカイブの提供	資料館が所有する資料の有効利用としてアーカイブし、写真資料のほか、横山家や日本鉱業株式会社の鉱山経営に関する資料などの閲覧、利用ができるようにする。
21 企画展示室の設置	企画展や特別展示を行える可動式のパネル・展示ケースを設置したスペースを新設または既存スペースを拡張。季節ごとやテーマに応じて展示内容を変更できるようにし、リピーターを増やす。

● 石による技術進化を追体験する—鉱物が支えた人類の発展と未来



イメージパース

石や鉱物は太古から現代そして未来に、人類の技術革新を支えます。人間は石を採掘・加工し、その特性を活かすことで道具を進化させ、エネルギーを生み出し、ハイテク産業を築いてきました。本展示では、石と科学の関係を軸に、人類の進化や鉱山技術の挑戦を深く掘り下げます。具体例を挙げながら、鉱物がどのように文明を支え、未来を形作るのかを体感するなかに、尾小屋鉱山を位置づけます。

22 石による技術進化をテーマとした展示コーナー	「石が開く科学の扉、未来を作る鍵」をテーマに、人間が石や鉱物を使いこなすことで「生きる力=科学の力」を進化させ続けてきたことを示す展示を設置。石器からハイテク鉱物（レアメタル）までの変遷を図解し、尾小屋鉱山の鉱山開発を位置づける。
23 尾小屋鉱山の歩み解説展示	尾小屋鉱山の歩みについて、鉱山を経営してきた横山家や日本鉱業株式会社が直面した課題や、それを乗り越えてきた挑戦や技術革新などをパネルや映像で紹介。成功例だけでなく失敗例も包み隠さず見せることで、“人類の叡智”のリアリティを感じさせる。また、かつて地下にはりめぐらされていた尾小屋鉱山の坑道模型を新たに設置し、その大きなスケール感を感じとってもらう。
24 銅ができるまで解説展示	銅の製錬過程を CG や投影マッピングで解説する展示を設置。真吹炉のセットを部分的に再現し、簡易的な炎の演出や熱風を感じる装置で臨場感を高める。製錬過程を見終わったあと、実物のカラミ煉瓦や銅のインゴット（製錬後の塊）を手に取り、質感や重さをリアルに感じさせる。

【楽しむ視点】自然を活かす技を楽しむ

● 自然と科学をつなぐ“工夫”の力を体感する



イメージパース

人類が築いてきた技術と知恵を自らの手で実感しながら、自然と科学を結ぶワクワク体験が行えます。石を活かしてきた人類の歴史を追体験し、“自分の手でやってみる”面白さを発見する場所です。素材を加工する体験から、自然資源を使って問題を解決する工夫の楽しさを味わい、あらゆるポイントで学びと発想を刺激する場所ともなります。

25 ワークショップスペースの整備	ワークショップスペースを設ける。小型炉を設置するほか、火起こしや石器づくりなどの小規模実習が可能な環境を作る。石割りハンマー、火打ち石、簡易作業服などを保管するロッカーやブースを整備。安全柵・消火設備などの必要な安全対策を行う。
26 銅の多面性を学ぶワークショップ	銅を中心とした金属を用いて、その特性や加工性を学ぶものづくりワークショップを行う。化学反応や温度調整など学びながら、“鉱物×ものづくり”を体感し、銅のアクセサリーなど金属製クラフトや、銅が電気を運ぶ特性を活かし、導電性実験やミニモーター作りをおこなう。EVや電化においても極めて重要な役割を持っており、現代の私たちの生活や未来の技術を支えていることを体験する。

● 副産物活用の歴史から“環境・循環型技術”を学ぶ



イメージパース

鉱山は資源を採掘する場であると同時に、副産物の活用や環境保全の取り組みが行われてきた場所です。これまでの環境保全への取り組みを取り上げるほか、銅の製錬過程で生まれたカラミを、煉瓦や建築資材として再利用した技術は、持続可能な社会を考える上での重要な先駆例であり、現代のリサイクル技術や資源循環の概念と結びつけることで、産業遺構の価値を未来へとつなげる意識を醸成します。

27 世界のカラミ常設展示	カラミ煉瓦（六角・四角・大小など）の実物や製造過程の解説を常設展示し、世界のスラグ煉瓦事例も紹介。“六角形のカラミは尾小屋のみ”という希少性を前面に打ち出す。
-----------------------------	--

3 マインロード

【位置づけ】五感で鉱山のリアルを感じる体験の中核

マインパークにおける体験の中核として、かつての鉱夫たちが対峙した環境をリアルに体感します。「見る」だけでなく、「感じる」ことに重点を置き、薄暗く湿った坑道を歩くことで、視覚だけでなく、聴覚、触覚、嗅覚を刺激し、先人たちの苦労、工夫、自然への畏敬の念を肌で学びます。

● 坑道内の環境整備



イメージバース

安全性を確保し、かつての鉱石採掘現場が提供するよりリアルな坑道体験と、持続可能なメンテナンス設備環境を実現します。

28 坑内の環境整備	マインロード内の支保工を点検・補強、または必要に応じて最新技術を用いて、坑内の安全性を保つ。同時に坑道内の設備面も、負荷の低減と機器の持続性を考慮した環境を整える。
29 照明・展示の刷新	省エネルギーで明るく、かつ坑道内の雰囲気を変えない LED 照明等、全面的に照明設備を更新し安心感と安全性を向上。かつての鉱石採掘現場が提供する空間を大切に、よりリアルな坑道体験となるよう、展示物や解説パネルを刷新する。

● 臨場感あふれる“没入体験”で歴史を追体験する



イメージバース

訪問者自身が当時の鉱夫になりきり、採掘や製錬作業を追体験する仕組みをつくることで、産業遺構のリアリティをより深く感じさせる工夫をします。例えば、マインロードでは、当時の採掘の音や鉱夫の会話や掛け声が流れ、坑道の薄暗い空間の中で作業していた様子が頭の中に浮かび上がるような演出を施したり、トロッコに乗って坑道に入る没入型の体験ツアーなどが考えられます。

30 トロッコ乗車ステーションの整備	上部（東）坑道内外でトロッコが走行できるようレールを敷設し、乗車ステーションを整備。安全柵や乗降設備を整え、走行時の安全性を確保する。常設運転が可能になるよう、転車台や行き止まりでの折り返し構造も検討。
31 没入体験の提供	下部（西）坑道内は徒歩探索道とし、スマホアプリや専用端末で音声ガイドを提供し、当時の採掘現場のドラマに来場者を巻き込む演出を用意。ユーザー位置に合わせて効果音やナレーションが変化する仕掛けを導入。定期的に行う特別イベントとして、役者やスタッフが鉱夫や技術者を演じ、徒歩探索、トロッコ乗車体験と組み合わせる。
32 鉱山作業員なりきり体験の導入	軽い作業着やレプリカの採掘道具を身に着け、鉱夫になりきる体験を提供。坑道内のフォトスポットやトロッコ乗車時の記念撮影コーナーを用意し、SNS 映えを狙う。フォトセットを資料館やマインロード入口近くに設置し、衣装の状態で遺構巡りができるサービスを検討。

● 坑道空間の新しい活用



イメージバース

坑道空間を新たに活用し、地域の食・観光・文化を一体化した体験を創出する。安定した温度を活かしてワインやチーズ、日本酒などを熟成・貯蔵し、春秋には試食フェアを開催。夏は納涼のホラーアトラクションを実施し、非日常感を堪能させる。地元の醸造所や生産者との連携により、多彩なプログラムを展開し、地域活性化につなげる。

33 低温区画を利用した熟成	坑道内の安定した温度・湿度を活かし、地元の醸造所との連携を図って高品質なチーズやワイン、日本酒の熟成を行う。低温区画を熟成庫として活用し、発酵や熟成に適した環境を創出。さらに、観光客向けには「熟成庫見学＋試食」の体験プログラムを用意し、珍しい“坑道熟成”を楽しめる場を演出。
34 季節性イベントへの活用	坑道内の照明を落とした暗い空間と気温が低めに保たれていることから、真夏には“納涼イベント”として季節限定の“肝試し”や“ホラーアトラクション”を企画。怪談や鉱山伝承をベースに演出を加える。ヒンヤリした空気と暗闇が恐怖感を増幅する。春・秋は「坑道熟成テイasting会」を開催し、チーズやワインの熟成経過をアピール。落ち着いた坑道見学を組み合わせることで来場者に上質なテイasting体験を提供する。

4 尾小屋鉄道広場 OGOYA TRAIN STATION（現第5駐車場）

【位置づけ】鉱山を支えた「産業の動脈」を知るフィールド

採掘された鉱石がどのように運ばれ、社会や人々の暮らしと繋がっていったのかを学ぶ場。トロッコや蒸気機関車（の展示や解説）を通じて、「運ぶ」という技術とその重要性を理解します。採掘現場（マインロード）から視野を広げ、鉱山が地域や社会全体に与えた影響を考えるきっかけを提供します。

● 尾小屋鉄道遺構の移転・動態展示機能強化



イメージパース

安定した地盤と空間を確保し、安全性とメンテナンスの持続性を確保し、訪問者やボランティアにとっても快適な空間を実現します。残されている尾小屋鉄道遺構や車両を活かすことで、尾小屋らしさあふれる動態展示環境を実現し、鉱山のまちと市街を結ぶ路線の景色と、沿線の暮らしの移り変わりを伝えます。団体などによる屋外での活動スペースとしても活用を図ります。

35 尾小屋鉄道遺構の展示場を整備

尾小屋鉄道の車両やレールを現在の第5駐車場に移転し、複数車両の整備・修理が並行可能な広さが確保できる屋内展示場（車両保管庫）を設ける。車両を雨雪から守り、展示・整備スペースも兼用する。転車台を移転、100m程度の運行コースを整備。かつての駅舎風にして、外にレールが伸びるイメージを演出。乗車体験ができるようにする。安全かつ休憩もできる作業スペースの確保によりボランティアの負担も軽減する。

5 カラミアート回廊

【位置づけ】アートを通じて暮らしの記憶に想いを馳せる

鉱山労働者とその家族が暮らした痕跡（カラミ煉瓦）が残る空間で、過去の生活に想いを馳せる場。歴史的な価値を高めるとともに、産業遺構の持つ独特の雰囲気と現代アートを融合させることで、ノスタルジーと創造性が交差する体験を提供します。

● カラミ遺構・まちなみ全体の学術調査

カラミ遺構とまちなみ全体の再生に向け、考古学、建築史、鉱山史など多岐にわたる専門家チームによる学術調査を実施します。調査・分析結果は将来的に Web 公開も視野に入れ、学術研究だけでなく、教育、観光、地域振興への活用・展開を目指します。

36 専門家チームによる現地調査	考古学、建築史、鉱山史、土木工学、歴史地理学などの専門家で構成される調査団を組織し、カラミ遺構・まちなみ全体を網羅的に調査。遺構の保存状態、構造的特徴、歴史の変遷などを詳細に記録。これまでほとんど調査されていないカラミ遺構について、さまざまな視点から調査することで新たな特徴や文化財的価値を見出し、地域資源としての価値をさらに高めていく。
37 デジタル測量と GIS データベース 構築	3D 測量など最新技術を活用し、カラミ擁壁、蔵、旧民家基礎などの位置情報、形状、寸法を高精度に計測。取得したデータを地理情報システム（GIS）に取り込み、デジタルアーカイブとして一元管理。将来的には Web 公開も視野に入れる。
38 カラミの物質科学的分析	六角形のカラミを含む各種カラミのサンプルを採取し、化学組成、鉱物組成、微細構造などを分析する。製造工程（原料、焼成温度、冷却方法など）を推定し、技術史的な意義を解明する。他の地域で産出するカラミとの比較研究を行い、その希少性や独自性を評価。六角形形状の優位性について多角的に検証する。
39 過去のまちなみの可視化	古地図、絵図、古写真、航空写真、文献資料、発掘調査成果、住民からの聞き取り調査など、あらゆる情報を収集・分析。GIS データベース上に、過去の土地利用、建物配置、道路網、水路、植生などを復元的にマッピング。現在の遺構情報と重ね合わせることで、時間軸に沿ったまちなみの変遷を可視化。

● 現代アートによる産業遺構の再生



イメージパース

訪問者と遺構の間に現代アートを通訳者として置くことで、残された遺構の物語を引き出します。例えば、デジタルアートやインスタレーションを用いて鉱山遺構に新たな表情を生み出したり、歴史的景観をキャンバスに、プロジェクションマッピングやインタラクティブな演出で過去の風景を再現して“時間のレイヤー”を重ねるなど。現代アーティストとのコラボによるインスタレーションで、歴史と現代アートが交錯する新たな体験を創出します。

40 アーティスト・イン・レジデンスプログラムの実施	国内外のアーティストを一定期間招いて鉱山遺構やカラミを題材としたインスタレーションを制作。尾小屋鉱山の歴史、記憶をアートによって引き出し、新たな視点を創出する。地域住民や子どもたちとワークショップやトークセッションを行い、新しい地域文化を育むことにも貢献する。
41 アートを用いた誘客イベントの実施	定期的に鉱山遺構全体でアートイベントを開催。昼はアート展示、フードトラック、マルシェ等で多様な層を呼び込み、夜は遺構へのプロジェクションマッピングで「遺構×アート」の幻想的な世界を創出。過去の写真や採掘風景などを光と音で演出し、ガイド解説で歴史も体感できる。アートを通じて過去と現在をつなぎ、地域の活性化を目指す。
42 ライトアップ等カラミ遺構のインフラ整備	遺構周辺に配線や防水コンセントを設置し、イベント実施に必要な電源を常備。照明やプロジェクター、スピーカーを屋外に常設できるように、耐候性・防犯面を考慮した設備(カバー、固定台)を整備。通常は控えめなライトアップで演出し、イベント時には明るく照らせるように調光可能なシステムとする。周辺の自然環境により発電されたグリーンエネルギーが使用できるとさらにストーリー性が期待できる。
43 アートギャラリーの整備	残存するカラミ遺構を利用し、アーティスト作品を展示するギャラリーとして用いることを検討。

6 OGOYA BASE（現ポッポ汽車展示館）

【位置づけ】マインパークと地域をつなぐコミュニティ・ハブ

大倉岳高原スキー場などの周辺の関連区域と鉱山遺構のある中核区域とをつなぎ、地域の魅力を最大限に引き出すハブとして現ポッポ汽車展示館の場を活かし「OGOYA BASE」へと生まれ変わらせます。駐車場、休憩スペースなど、来訪者が快適に過ごすためのアメニティ機能を提供します。

● 周辺自然の魅力を引き出すアウトドア活動拠点の整備



イメージパース

キャンプサイトやハンモック、焚き火炉などアウトドア活動が楽しめる自然体験の場として位置づけるとともに、地元の生産者や店舗等と連携し、マーケットやフードトラック等の出店を目指すことで、訪れるすべての人々が自然、地域、そして新たな発見につながる場を創出します。

44 アウトドア体験エリアの整備	ポッポ汽車展示館周辺を、キャンプとリラクゼーションが楽しめる「OGOYA BASE」へと再整備。芝生にキャンプサイト、ウッドチェア、ハンモックを設置し、焚き火炉も用意。アウトドア体験利用者や登山者向けの公衆トイレも備える。フードトラックで軽食やコーヒーを提供し、アウトドア体験を充実させる。展示車両は第5駐車場へ移動。
45 キャンプイベントの開催	OGOYA BASE でキャンプイベントを開催。昼は自然体験（ワークショップ、ネイチャーゲーム、クラフト体験、冒険プログラム）、ローカルマーケット、アウトドア料理。夜は揺らめく焚き火を囲んで星座解説や地球の歴史などのミニレクチャーも実施。地元の美味が集まる夜市やフードトラックも出店し、食の楽しみもプラス。五感を刺激するアクティビティと幻想的な空間で、学び、癒され、地域と繋がる滞在型体験を提供し、幅広い層を惹きつける。

7 関連区域

● 自然と調和した癒し体験の提供



イメージパース

関連区域の豊かな自然を活かし、訪問者が自然の中で心身をリフレッシュできるような仕組みを設計します。大倉岳高原スキー場の山頂や森林の中でのサウナ体験や、地元の湧水を使ったコーヒーブレイクなど、ゆったりとした時間を過ごしながら、自然と一体化する感覚を得られる場を整備し、訪問者が「地球の大きな営みの中にいる自分」を静かに見つめる機会を提供し、自然への敬意と共存の意識を育みます。

46 マインドフルネス体験プログラムの実施

朝夕日を眺めながらドリップコーヒーを飲んだり、サウナテントやサウナバスを利用した屋外サウナ体験、ヨガ体験などを実施する。絶景と共に、自然の静けさを味わいながら“心と身体を整える時間”を提供し、自然との一体感を深める。

● 自然を“冒険”する環境の整備



イメージパース

関連区域の雄大な地形や、やまなみを直に体感し、地球のスケールの大きさが想像できる体験を提供します。大倉岳高原の山頂へ登るトレッキングを通じて、日本海まで一望する景色を楽しむことができるほか、訪問者が自然の偉大さを身体全体で感じられる環境を整えます。

47 トレッキングルートの整備

大倉岳高原の複数ルートを再点検し、道標・ベンチ・簡易トイレなどを適所に設置。子連れ対応の初心者コースと健脚向けコースを分かりやすく案内。自然観察ができるガイドブックやマップを新たに作成し、安全に楽しめる山歩きを演出。

第五章 管理運営の考え方

1 管理運営形態

施設運営にあたっては、行政による直営のほか、民間活力を活かした運営について検討します。多様なステークホルダー（市、NPO、ボランティア、民間企業、大学、国の研究機関など）の参画により専門的な技術力や経営ノウハウを幅広く活用し、コストの削減とサービスの質向上を図るため民間事業者へのサウンディング等を経て、指定管理を含めた柔軟なスキームを検討します。隣接する大倉岳高原スキー場と管理を連携することなども含め、通年雇用の実現や、管理費用の平準化につながる方策の検討も必要です。

（１）行政による直営と外部連携

専門性を必要とする資料の収集や調査・研究は、国の専門機関や大学等の協力を得ながら引き続き行政が担うとともに、民間のノウハウを活かした分野（集客広報、物販・カフェ運営、体験企画等）は、民間企業やNPO、地域団体への委託または協働とすることで、費用負担や法定管理の責任主体を明確にしながら、専門的な知識や技術を柔軟に活かします。

（２）サウンディングによる連携先の検討

運営や連携に関心のある事業者や地元団体、関連団体へのサウンディング、意見交換を行い、参入条件や収益性などの把握など民間活力を活かした運営の実現可能性を探ります。

2 連携体制

（１）協議・合意形成の仕組み構築

「（仮称）尾小屋マインパーク」の運営にあたっては、小松市、石川県、NPO法人、ボランティア団体、周辺事業者、観光協会、大学関係者など、多様なステークホルダーが定期的に集まる場として協議会などを設定。運営主体が主導して定期開催し、必要に応じて小さなテーマ別WGを設置して検討を進めます。

（２）協議会の内容

協議会においては下記に掲げる内容について協議・合意形成を図ります。

- ・年度ごとの運営報告・利用状況の共有
- ・イベントやプロモーションの情報交換
- ・周辺地域での新事業・整備計画についての連携協議
- ・ボランティア活動の展開や課題抽出

3 関係人口の拡大への取り組み

地域内外に尾小屋周辺地域に「主体的に継続して関わる人」を増やすことで、地域のにぎわいを持続可能にすることを目指します。そこで重視されるのが、単なる「観光客」から進んで、学びや作業、プロジェクト運営などに能動的に参加する「関係人口」をいかに育むかという視点です。以下では、学術調査や産業遺産保全など「市民が当事者として参加する活動」を軸にして、関係人口を拡大していくための要点を示します。

(1) 分散型ネットワークの構築

エリア全体で「鉱物愛好家」「鉱山遺構愛好家」「鉄道愛好家」「アウトドア愛好家」など、すでにさまざまなテーマを持つコミュニティが存在しています。これらコミュニティをゆるやかにつなぎ、遠隔地を含む多様な人が参加できる仕組みを整備することで、関係人口の裾野を広げます。

● 地域拠点と遠隔参加のハイブリッド

- エリア内には、既存 NPO・博物館・資料館などを拠点にした地域コミュニティを形成。
- 遠隔地居住者でもオンラインで情報共有や勉強会に参加できるようにし、実際に現地へ来るときはオフラインの作業やイベントに合流できる体制を整える。

● 協議会が支援ハブとして機能する

- 協議会や行政が、個別コミュニティ同士の連絡調整や広報、資金調達のサポートを行い、多様なコミュニティをバックアップする。
- 有志が集まればいつでも新しいテーマでコミュニティを立ち上げられる柔軟性を持たせる。

(2) 多世代参加と次世代育成

小学生から高齢者まで多世代が一緒に参加できる活動設計を行い、世代間の自然な交流を生み、知識・技術・地域への愛着が持続的に伝わる仕組みを構築します。家族や学校等との連携を強化し、早期から地域の学びに触れる機会を用意します。

● 家族単位での体験プログラム

- 親子が共同作業できる体験メニュー（鉱山探検、カラミ遺構の簡易調査、トロッコ修理補助など）を開発し、世代を超えた学習・楽しみの場を提供。
- シーズンイベントやスタンプラリーなど、リピート来訪を促す仕組みを整える。

● 学校教育との連携

- 出前授業やインターンシップ制度を通じて、地元小中高校や大学との協力体制を築く。
- 学生たちがワークショップやイベント企画の一部を担い、若い力を地域づくりに活かす仕掛けを整える。

● 若年層のリーダー育成

- SNS 広報や映像制作など、若い世代の得意分野を活かせる役割を用意。
- プロジェクトリーダーやサブリーダーを若手が担えるようにして、早い段階から運営に携わる経験を積んでもらう。

(3) 多層的な学習と参加プログラム

市民参加型の学術活動や遺構保全で長く成功する地域では、初心者から実践者、そして専門志向まで、多段階の参加プログラムを用意していることが特徴的です。下記のようなアプローチで個人がステップアップできる設計を意識します。

● 基礎知識の入門講座

- 「鉾山史入門」「トロッコ整備の基礎」「遺構調査の基本」など、初心者向けの学習会をオンライン・オフラインで開催。
- 距離や時間の制約がある人でも、ウェブ上の資料や動画を用いて事前学習できるようにする。

● 実地体験プログラム

- 鉾山遺跡周辺の調査や簡易修復、トロッコ整備、裏側ガイド体験など、「自分の手で動かす」経験が得られる場を整備。
- ボランティアや係分担制（受付、記録、資材管理、広報など）を導入し、誰でも参加しやすい仕組みを作る。

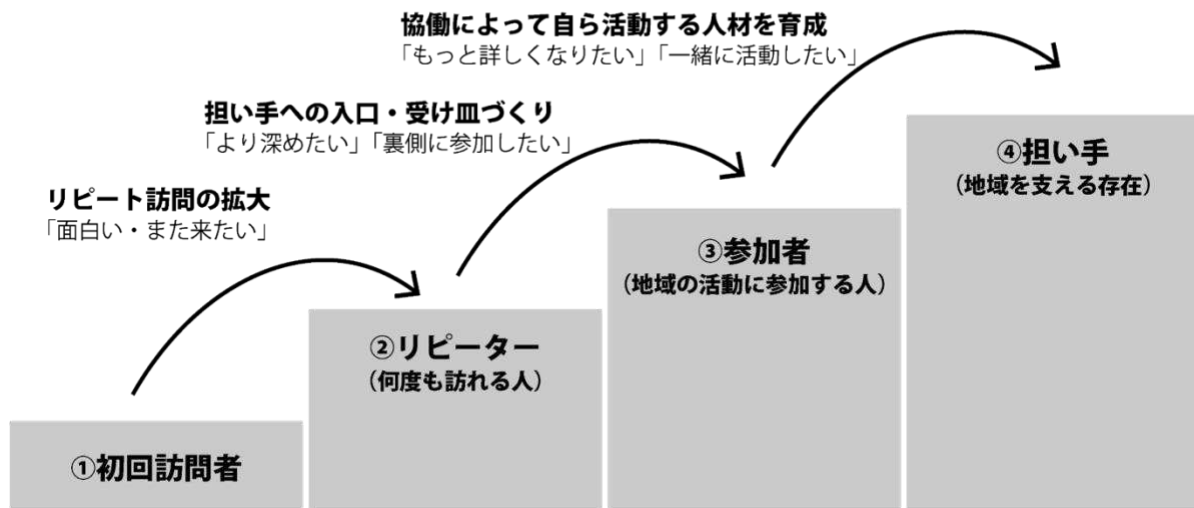
● 専門分野への深化

- 分野ごとに専門的なグループ（鉾物研究、遺構保全、鉄道模型開発など）を組織し、大学や研究者とも連携。
- スキル習得度合いや成果に応じて「公式ガイド」「認定マスター」などの称号を発行し、地域資源の調査・研究に貢献しやすい道筋を整える。

(4) リピーターから関係を深める仕組みの構築

訪問者から地域を支える次世代の「担い手」を生み出すために、関係人口の拡大に向けたプロセスを設計し、各ステップを乗り越えるための施策に取り組むことを目指します。

<関係人口創出に向けたステップ>



①初回訪問者

初回訪問者は、尾小屋町や鉱山資料館、その周辺地域に「初めて興味を持ち、足を運んだ人」のことを指します。この段階では、利用者自身が「もっと知りたい」「また来たい」と感じられる初回体験を提供することが、最も重要な目標となります。

その初回訪問者が「尾小屋って想像以上に面白い」「次は家族や友人を連れてきたい」と思うことで、次のステップ（リピーター）につながるきっかけを創出します。

● 主な施策例

○ 限定ツアーや特別プログラム

一般公開されていない坑道エリアの見学や、ナイトツアー・鉱山探検アドベンチャーなど、初回訪問者ならではの“特別感”を演出。非日常体験によって強い印象を与えます。

○ SNS やウェブでの事前情報発信

旅行メディアや公式 SNS で「尾小屋のここが面白い」「まずはこれを見てほしい」といったコンテンツを丁寧に発信し、初回訪問者が当日楽しめるポイントを分かりやすく案内。

②リピーター

リピーターは、初回訪問がきっかけで尾小屋に再び訪れた人のこと。何度も足を運んでもらうほど愛着が深まり、地域のファン化が進みます。そのため、「来れば来るほど面白くなる」仕掛けが重要です。

何度訪れても新しい発見があり、かつ「常連」としての特別感も得られるため、リピーターは施設・イベントへの愛着を高めます。次のステップ（参加者）へ進む際の大きな原動力となります。

● 主な施策例

○ シーズンイベントや連続参加プログラム

春の自然と産業遺産を巡るハイキングツアーや、夏のカラミ遺構キャンプフェス、マインロードでの肝試し、冬の鉱山遺跡スノートレッキングなど季節ごとに異なる体験を企画。リピーターが毎回新鮮な驚きを得られるようにします。

○ リピート特典の可視化

例えば訪問回数に応じて増えるバッジやスタンプカード、特典付きの「VIPパス」など、再来を促すインセンティブを設ける。SNS投稿や口コミを通じて、ほかの人にも共有される可能性が大きい。

③参加者

リピーターとして何度も訪れているうちに、「もっと深いところまで関わってみたい」「活動の裏側を見てみたい」と思うようになった人たちを、地域活動に迎え入れる段階です。この“参加者”ステップでは、“見学する側”から“ちょっと手伝ってみる側”へ変化するきっかけをつくり、気軽に関与できる体制を整えます。

参加者として活動を経験すると、地域の運営側の視点や裏側の魅力を深く知ることができます。これが「もっと積極的に関わりたい」「仲間と一緒に何かをやり遂げたい」という意欲の芽生えにつながり、最終ステップの“担い手”へと成長する素地が育まれます。

● 主な施策例

○ ジャンル別の入口づくり

鉱物愛好家向けには「鉱物クリーニングワークショップ」、鉄道ファン向けには「トロッコ整備体験」など、それぞれの興味関心にフィットするボランティアやイベントを用意する。

○ 短期プログラムやガイド補助など“試し参加”制度

大掛かりな運営にいきなり参加するのはハードルが高いため、1日～数時間ほどのライトな補助スタッフ体験を常時募集。ボランティア参加者が気軽に応募できる仕組みをつくる。

④担い手

“担い手”は、地域の活動やプロジェクトに一定のスキルや知識をもって深く関わり、なくてはならない存在へと成長した人たちを指します。自身が中心となって新たな企画を立ち上げたり、次世代の人材を育成する立場として活躍することを目指します。

担い手が増えることで地域の運営負担を分散し、各種プロジェクトの推進力も高まります。また、担い手が“次の担い手”を育てる好循環が生まれれば、関係人口の拡大スピードが加速し、持続可能なまちづくりへと近づきます。

● 主な施策例

○ 「尾小屋鉱山マスター」認定制度

トロッコ整備や鉱山遺産ガイドなどで一定の専門知識とスキルを認定。認定証や名札を付与して“公式”の担い手として認め、活動のモチベーションを高める。

○ プロジェクト型活動への参加

鉄道遺構復元プロジェクト、カラミ蔵再生プロジェクト、お土産づくりプロジェクトなど、目的が明確でやりがいのある活動を設定し、担い手が自分の役割を果たしながら成功体験を得られる場を用意する。

○ 次世代育成の仕組み

認定者に対して、後輩や新規参加者をサポートする役割を担ってもらう。ワークショップの講師やメンターとなり、自身の経験を後進に伝えることで、コミュニティの世代交代と活性化を促進。

第六章 事業スケジュール

構想策定を踏まえ、令和 7 年度以降は、資料館やマインロードの改修整備・魅力アップに係る具体的な導入機能やサービスの内容、観光誘客・教育プログラムの拡充、事業費及び活用可能な財源、段階的な事業スケジュールの検討を行います。

特に施設や設備の老朽化の進展が顕著な「資料館」及び「マインロード」の機能向上やリニューアルは、持続活性化構想の核となる部分であり、優先的な取り組みが必要であると想定しています。全体構想の計画的かつ段階的な実施も含めて事業スケジュールの検討を行います。

また、民間事業者との対話を通じて、民間のノウハウや活力を活かした事業スキームについても検討を行い、地域一体となった持続可能な運営体制の構築を目指していきます。

おわりに

本構想は、「楽しみ、感じ、知る」という学びを通じて、生きる力を育む地域づくりを目指します。「楽しそう！」と尾小屋を訪れた人が、自然と共に生きている現実に触れ、自らの好奇心を深い学びへと昇華させる、そのプロセスこそが、地域の持続的な発展を支える原動力となります。

学びとは、単なる知識の習得ではなく、自分の感覚を研ぎ澄まし、問いを立てながら世界を理解することです。尾小屋の風景や遺構に触れることで、「どうして？」と感じ、歴史や自然、技術の結びつきを考え、知る、そこにあるのは、多様な視点を持ち、未来を生き抜く力を養うための学びです。

また、過去を知ることは、一歩先を予見し、備えを整える力にもつながります。日本には“絶対の安全地帯”はなく、防災・減災への意識を高めることが不可欠です。尾小屋には、大地の歴史と、先人たちが築いた知恵や工夫が残されており、それを学ぶことは、過去を知ると同時に、これからの時代を生きるための重要な手掛かりとなります。

尾小屋鉱山資料館は、周辺の環境を活かし、歴史を振り返るだけでなく、未来へとつなぐ“生きた学び”の拠点となることを目指します。防災・減災、環境問題、地域の持続性など、現代の課題に応える場所、人々が「感じる・知る・楽しむ」体験を通じて主体的に学び、成長する場所として、ここに新たな価値を生み出し、地域の未来を創り続けていきます。

過去から学び、今を考え、未来を拓く。

尾小屋の物語がここからあらたに紡がれていきます。

参考資料1 尾小屋の地質と鉱山遺構の変遷

1 尾小屋の地質学的特徴

小松市は、古くから「石の文化」が根付く地域です。この地域では、日本列島の形成期における海底火山活動によって生まれた「グリーンタフ」が、建築・土木・工芸品など多岐にわたる用途で利用されてきました。尾小屋鉱山も、このグリーンタフ地帯に位置し、長年にわたり貴重な鉱物資源を産出してきました。

(1) 日本海・日本列島の誕生とともに形成されたグリーンタフ

地層は、地球規模の壮大な歴史を物語っています。約 2,500 万年前まで、日本海は存在せず、日本列島はアジア大陸の一部でした。しかし、恐竜の絶滅後、大型哺乳類が栄えた時代に、大陸地殻に裂け目が生じ、約 1,000 万年をかけて徐々に日本海が形成されました。これは、現在から約 1,500 万年前のことです。

この間、海底火山の噴火が繰り返され、大量の火山灰が堆積することで凝灰岩が形成されました。特に、この時期に形成された凝灰岩は緑色を呈することが多く、「グリーンタフ（緑色凝灰岩）」と呼ばれています。尾小屋地域の地盤も、このグリーンタフによって成り立っており、大地の基盤を形成しています。



碧玉

角礫凝灰岩

流紋岩

(2) 地殻変動によって生まれた浅熱水性鉱脈

日本海の形成と日本列島の地形変化が進む中で、尾小屋地域の地下ではさらなる地質変動が発生していました。その結果、「浅熱水性鉱脈」と呼ばれる鉱床が形成されました。

約 3,000 万年前から 1,500 万年前にかけての激しい地殻変動により、海底には大きな裂け目が生じました。この裂け目から地下深くに蓄積されていた高温の熱水が上昇し、地表付近で圧力と温度が低下したことにより、熱水中に溶け込んでいた銅・鉛・亜鉛などの鉱物成分

が岩の隙間に沈殿しました。この過程の積み重ねにより、尾小屋には豊かな鉱脈が形成されたのです。

尾小屋で発見された銅鉱脈をはじめとするこれらの鉱床は、1 億年以上にわたる地球の営みによって生み出された「自然からの贈り物」といえます。これらの鉱脈は、後の時代に人々の手によって掘り起こされ、小松市の産業の発展に大きく貢献しました。

（３）尾小屋鉱山の鉱脈の特徴

尾小屋鉱山の鉱床は、銅鉱石（黄銅鉱）を中心に、鉛鉱石（方鉛鉱）や亜鉛鉱石（閃亜鉛鉱）など、多様な鉱物で構成されています。また、微量ながら金や銀も含まれていたため、金や銀の需要が高まった江戸時代前期には、採掘がおこなわれていました。しかし、大規模な金銀鉱床は見つからず、最終的には銅の採掘が中心となり、鉱山の発展につながりました。

尾小屋の鉱脈には、特筆すべき特徴があります。それは、鉱脈が比較的浅い地層に分布していたこと、そして地質が比較的柔らかく、掘削が容易であったことです。これにより、後の時代における鉱山開発では、資源を効率的に採掘することが可能となりました。

こうした地質学的な特徴は、尾小屋を単なる「過去の鉱山」ではなく、現代においてもジオパーク的な学びの場としての魅力を持つ地域にしています。地表に現れた露頭や採掘跡を訪れることで、地球規模の時間の流れに思いを馳せ、壮大な自然の営みを体感することができます。



黄銅鉱



水晶

2 尾小屋鉱山の変遷

（１）江戸時代における金の採掘

尾小屋鉱山の最も古い記録としては、天和 2（1682）年に金の採掘が行われていたとの記録が残されています。また、18 世紀はじめの宝永年間、18 世紀後半の天明年間に採掘が試みられたと伝わりますが、詳しくはわかりません。

（２）明治期～昭和初期における鉱山開発の進展と鉱山経営

明治期に入ると、日本の近代化が進み、鉱山開発も本格的に加速しました。明治 11（1878）年、尾小屋の「松ヶ溝」において橘佐平が銅鉱石の露頭を発見し、鉱山開発の機運が一気に高まりました。明治 13（1880）年には、元士族の吉田八百松ら 6 名が採掘を開始しましたが、資金不足などの課題に直面し、鉱山経営は困難を極めました。

こうした状況の中、同年には横山隆平・横山隆興が経営に参画し、多額の資金を投じながら鉱区を拡大しました。その結果、明治 19（1886）年には富鉱脈の発見や、銅価の回復によって経営が好転し、明治 20 年代以降、鉱山経営は順調に発展・拡張を遂げます。

しかし、大正後期になると不況や銅価の下落で経営不振に陥り、昭和 6（1931）年、横山家による経営が終焉。尾小屋鉱山を譲り受けた日本鉱業株式会社が経営を再開し、大企業としての経営と新しい技術の導入などで再び発展していきました。



横山家経営時代の尾小屋鉱山の様子（左から、鉱山事務所及び精錬所、選鉱場、本舗坑口）

（３）鉱山まちの誕生

鉱山の拡大とともに、尾小屋の山間部にも活気あるまちが形成されました。労働者向けの住宅や商店街が立ち並ぶだけでなく、劇場や映画館、パチンコ店、鉱山病院などの施設も建設され、一時期は人口が 5,000 人を超えたといわれています。

「嫁にやるなら尾小屋へやらんせ、金が天から地から湧く」と歌われるほど、尾小屋は賑わいを見せました。さらに、尾小屋鉄道の敷設によって鉱石の輸送が効率化されると、外部から人材や物資が流入し、尾小屋は“北陸の鉱山都市”として繁栄しました。



多くの建物が建ち並ぶ鉱山まちの様子 昭和 37（1962）年 6 月

（４）戦後の繁栄と閉山

1950年代に入ると、尾小屋鉱山の銅生産量は年間2,000トン以上に達し、日本の高度経済成長を支える重要な産業拠点となりました。しかし、海外から安価な鉱石が輸入されるようになったことに加え、国内のエネルギー政策の転換や鉱床の枯渇が進んだことにより、昭和37

（1962）年に本山や製錬所が閉鎖されました。

その後、昭和46（1971）年大谷支山が閉じられ、尾小屋鉱山全体が閉山しました。かつての賑わいは途絶えましたが、鉱山開発によって培われた技術は今日の機械産業にも受け継がれています。



坑道 昭和37（1962）年6月



丘堅坑・煙突



選鉱場



索道

3 尾小屋鉄道の変遷

(1) 鉱山のまちに生まれた鉄道

尾小屋鉱山は明治 19 (1886) 年に豊富な鉱脈が発見されると鉱山は急成長を遂げました。

鉱石の輸送は当初、牛馬や人力に頼るしかありませんでしたが、輸送効率の向上が求められるようになり、大正 8 (1919) 年に尾小屋鉄道が開通しました。この鉄道は「軽便鉄道 (軌間 762mm)」と呼ばれる小型の路線で、鉱山と小松市街地を結ぶ重要な交通手段となりました。

(2) 尾小屋鉄道の全盛期

尾小屋鉄道は、小松駅の南に位置する「新小松駅」から山間部の「尾小屋駅」までの 16.8km を結ぶ路線でした。開通当初は貨物輸送が中心でしたが、次第に鉱山関係者やその家族、地元住民の生活路線としての役割を担い、旅客営業も開始されました。

昭和 30 年代には鉱山街の人口が約 5,000 人に達し、映画館やパチンコ店が立ち並び「銀座通り」が形成されるほどの賑わいを見せました。この時期、尾小屋鉄道も最盛期を迎え、昭和 36 (1961) 年には年間旅客数 113 万人を記録しました。



西大野駅 日曜日の朝 昭和 51 (1976) 年 11 月

(3) 映画やドラマの舞台となった尾小屋鉄道

尾小屋鉄道は、映画やドラマのロケ地としても利用され、多くの作品に登場しました。特に有名なのが、昭和 47 (1972) 年公開の映画『男はつらいよ 柴又慕情』で、主人公・車寅次郎 (渥美清) が列車を待つシーンに「金平駅」が登場しました。

また、昭和 46 (1971) 年放送のテレビドラマ『キイハンター』では、尾小屋鉄道や鉱山跡がロケ地として使用され、尾小屋の風景が全国に紹介されました。

(4) 鉄道の終焉と保存活動

昭和 40 年代に入り、海外産の安価な銅の流入と自動車の普及による道路整備の進展により、尾小屋鉱山の閉山とともに鉄道の役割も縮小していきました。こうした状況を受け、尾小屋鉄道は昭和 52 (1977) 年に廃止されました。

しかし、現在も尾小屋鉄道の一部車両は保存され、地元住民や鉄道ファンによって大切に守られています。「ポッポ汽車展示館」では、当時の車両や関連資料が展示されており、往時の賑わいを伝えています。また、小松市符津町の「いしかわ子ども交流センター小松館」

では、「なかよし鉄道」として尾小屋鉄道の一部の車両（キハ 1 ほか）が動態保存されており、今も乗車体験ができます。

このように、尾小屋鉄道は単なる廃線跡ではなく、地域の歴史と文化を伝える重要な遺産として、今も多くの人々に親しまれています。



金野付近を走行するキハ 1 昭和 52（1977）年 1 月

4 カラミ遺構の変遷

(1) カラミとは

銅を製錬する過程では鉄分と珪酸鋳が結びついた副産物が発生します。これが「カラミ」と呼ばれるもので、溶鋳炉で高温に熱せられ溶かされ銅を除いた後に固まり、冷却されると黒光りする特徴を持つ物質となります。

当初、カラミは単なる産業廃棄物として山の奥に廃棄されていました。しかし、明治後期になると、その頑丈さや耐久性に着目され、鉄箱や鉄枠で冷却した後に六角形や四角形の「カラミ煉瓦」として加工されるようになりました。このカラミ煉瓦は、鋳山施設のみならず、住宅の基礎や塀、道路の縁石、さらには墓石にまで使用されるようになり、尾小屋ならではの景観を形成する要素となりました。



製錬真吹炉（横山家経営時代）



製錬所全景（時期不詳）

(2) カラミによるまちなみの形成

尾小屋のまちを歩くと、かつての鋳山まちの面影が至る所に残っています。特に、六角形のカラミ煉瓦を積み上げた擁壁は、まるで要塞のような重厚な佇まいを見せています。

カラミによって形成された尾小屋のまちなみは、黒く重厚な壁が連なる独特の景観を生み出しました。これは、鋳山のまちならではの景色として、今もその威容を誇っています。



六角形のカラミ煉瓦を積み上げた擁壁

(3) カラミとともにある暮らし

尾小屋の住民にとって、カラミは単なる建材ではなく、生活の一部であり、まちの歴史を象徴する存在でした。黒光りするカラミ煉瓦は「尾小屋の誇り」として受け入れられ、住宅の基礎や庭先の敷石として活用されました。また、まちのあちこちには、カラミを積み上げた塀や基礎が見られ、学校や寺院にまで広がりました。特に、光教寺の外壁は六角形のカラミ煉瓦で囲まれ、荘厳な雰囲気を醸し出していたと伝えられています。



六角形と四角形カラミ煉瓦を積み上げた塀

こうした活用は、尾小屋のまち全体にカラミの存在が根付いていたことを示しています。

しかし、昭和 46（1971）年に尾小屋鉱山が閉山すると、まちの活気も失われ、住民の多くが離れていきました。カラミで造られた建物も、時代の流れとともに解体され、多くが姿を消しました。それでも、現在も一部の遺構が残り、鉱山の歴史を伝える貴重な文化遺産となっています。

（４）保存活動と新たな価値の発見

近年、尾小屋のカラミ煉瓦や擁壁は「カラミのまち」として保存・活用が進められています。特に、NPO 法人「カラミの街保存会」が発足し、尾小屋独自の産業遺産を後世に伝える活動を展開しています。また、尾小屋鉱山資料館では、カラミの歴史や製造技術について学べる展示が行われており、かつての鉱山の繁栄とともに、カラミが果たした役割を知ることができます。

さらに、カラミを活用したアート作品の制作や、観光資源としての利活用も模索されています。かつては廃棄物とされていたカラミが、再び価値を持つ時代が訪れつつあります。このような取り組みにより、尾小屋の歴史が後世に引き継がれるとともに、新たな地域活性化の可能性が広がっています。



馬車道の風景（カラミ煉瓦を積み上げた擁壁の上奥に鉱山事務所の後ろ姿がみえる）

5 尾小屋鉱山周辺の自然環境の変遷

(1) 環境破壊と鉱害の影響

尾小屋鉱山の操業に伴って深刻な環境破壊が発生しました。特に、製錬所から排出された亜硫酸ガスによる「煙害」によって、周辺の森林が枯死し、山肌が露出するなど、広範囲にわたる被害が確認されました。当時の記録によると、尾小屋周辺の山林では木々や草花がほぼ全滅し、土地は褐色の荒地と化していたといわれています。

また、鉱山から排出された廃水による水質汚染も深刻でした。郷谷川や梯川では、鉱毒の影響で魚類が完全に姿を消し、水質悪化が地域の農業や農作物にも大きな被害をもたらしました。このような鉱害は、鉱山の閉山とともに徐々に終息へ向かったものの、地域には長期的な環境負荷が残されることとなりました。

(2) 緑化事業と生態系の回復

鉱山の閉山後、昭和 47（1972）年より、石川県主導の大規模な緑化事業およびカドミウム汚染対策が開始されました。植林や土壌改良といった地道な取り組みが進められた結果、尾小屋周辺の山々には再び緑が戻り、かつて荒廃していた土地が徐々に回復しました。

年を追うごとに植生は拡大し、現在では四季折々の里山の彩りを楽しめるまでに回復しています。水質の改善も進み、溪流魚も戻り始め、清流に生命が蘇りました。また、鉱山跡地には散策道や登山道が整備され、かつての採掘遺構を巡りながら自然を学べる環境教育の場としての活用も進んでいます。

(3) 持続可能な地域づくりへの展開

緑化事業によって再生した尾小屋周辺の里山では、地域資源を活かした新たな文化や産業が芽生えています。

① 里山の自然と体験型観光の活性化

大倉岳や鷹落山などの登山コースでは、春の山菜採りや四季折々の美しい風景を楽しむことができ、伝統的な里山暮らしを体験しながら自然との共生を実感できます。さらに、郷谷川流域では非常に珍しい低山地に自生する水芭蕉が群生し、清冽な水を活かした無農薬野菜の栽培など、環境保全と地域経済を両立させる持続可能な取り組みが注目されています。



西尾地区の入口・布橋のミズバショウ自生地

② 地域資源を活用した新たな食文化の創出

旧西尾小学校をリノベーションして誕生したオーベルジュでは、地元の山菜や能登の海の幸を活かした創作料理が提供され、訪れる人々に里山の魅力を伝えています。また、隣接する醸造所では、“酒造りの神様”と称される農口尚彦氏の伝統技術を活かし、白山の伏流水を用いた日本酒が生み出されています。

③ 石切り場遺構の継承と近代建築とのつながり

観音下町で採掘される軽量かつ耐火性に優れた「観音下石」は、かつて日華石（にっかせき）や千歳石（ちとせいし）の名称で全国流通し、各地の近代建築や現代の史跡整備などにも使用された実績があります。惜しまれながらも令和とともに廃業となりましたが、国道からも遠望できる壮大な石切り場跡は見る者を圧倒し、近年、その景観に触発された海外の芸術家が現地で石段のアートを構築するなど、新たな価値観を生み出しています。



観音下石切り場

また観音下は、「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称された旧甲子園ホテル（現・武庫川女子大学甲子園会館）や、建設当時東洋一の大邸宅とうたわれた旧前田侯爵邸など、各地に残る名建築に使用された石材の生まれ故郷であり、「観音下石」のネームバリューを磨くことで、その石切り場は廃業してもなお観光資源としての価値を秘めています。

地下資源の生成から人間による活用まで、同じ時間を共有してきた石の文化関連遺構群の継承は、里山の資源活用の可能性を広げるとともに、新たな経済的価値を生み出すものといえます。このように、尾小屋とその周辺では環境保全・観光・食文化・教育といった多方面で新たな価値が創出され、かつて荒廃していた鉱山跡地が持続可能な地域モデルへと生まれ変わりつつあります。

参考資料2 参考事例

訪問価値の磨き上げにあたって、それぞれ異なる分野からのアプローチを持つ4つの事例を取り上げ、それぞれの視点から深掘りすることで、地域活性化への多角的な視点を提供することを目的とします。具体的には、下記について考察します。

1. 産業遺産活用と地域再生事例「ツォルフェライン、エムシャーパーク（ドイツ）」
2. 産業遺産と現代アートの融合事例「犬島精錬所美術館（岡山県）」
3. 自然を活かしたテーマパーク事例「ネスタリゾート神戸（兵庫県）」
4. 現代アートによる土地の記憶の可視化事例「南三陸 311 メモリアル（宮城県）」

1 産業遺産の活用と地域再生事例

「ツォルフェライン、エムシャーパーク（ドイツ）」

（1）ツォルフェライン炭鉱業遺産群

かつてドイツ経済の心臓部であったルール工業地帯は、20世紀後半に産業構造の転換期を迎え、多くの炭鉱や製鉄所が閉鎖に追い込まれました。その中で、エッセン市にあるツォルフェライン炭鉱業遺産群は、1847年に最初の炭鉱が設立され、1986年まで操業を続けていました。閉鎖後、産業遺産としての保存と活用という道を選び、特に、1932年に稼働を開始した第12採掘坑は、バウハウス様式を取り入れた機能美と芸術性を兼ね備えた建築物として、「世界で最も美しい炭鉱」と称されています。閉鎖後は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州政府が跡地を購入し、産業遺産として保護・整備を進めた結果、2001年にはユネスコ世界遺産に登録されました。

ツォルフェラインでは、各施設を博物館、美術館、デザインセンター、カフェ、レストランなどに転用することで、新たな魅力を生み出しています。例えば、第12採掘坑は、レッド・ドット・デザイン・ミュージアムとして、世界的に有名なデザイン賞を受賞した製品を展示しています。また、ルール博物館では、ルール地方の石炭産業の歴史、文化、自然史に関する展示を行っています。かつて選炭場として使われていた建物を利用した博物館は、当時の雰囲気を残しつつもモダンなデザインで、ルール地方の歴史を学ぶことができます。さらに、コークス工場エリアでは、コンサートやフェスティバルなどのイベント、遊園地やプール、アイススケート場など、季節に応じた様々な催し物が開催されています。

このように、ツォルフェラインは、産業遺産を文化施設やレクリエーション施設として活用することで、地域経済の活性化に貢献しています。同時に、産業遺跡を保存・活用するこ

とで、地域住民に過去の産業の歴史を語り継ぎ、地域への愛着と誇りを育むことに成功しているといえます。

（２）エムシャーパーク

エムシャーパークもルール工業地帯における産業遺産活用と自然再生の成功例です。かつては工業排水で汚染されていたエムシャー川の水質改善を行い、周辺の炭鉱跡地や製鉄所跡地を公園やレクリエーション施設として再生することで、広域的な緑地空間を創出しました。このプロジェクトでは、エコロジカルな観点から、建物の改修や新築に際して、木材の利用、太陽光発電パネルの設置、雨水の循環利用など、環境に配慮した技術が導入されています。

Landschaftspark Duisburg-Nord は、エムシャーパークを代表する施設の一つです。かつての製鉄所跡地を、フィールドアスレチック、ロッククライミング、ダイビングセンターなど、多様なアクティビティを楽しめる公園として再生しています。特に、巨大なガスタンクを改造した世界最大の屋内ダイビングセンター「Gasometer」は、多くの観光客を惹きつけています。また、エムシャーパークでは、「Emscherkunst」と呼ばれるアートプロジェクトも展開されています。これは、地域住民や来場者が、ランドスケープと関わり合いながら、身近な自然を再認識する機会を提供することに寄与しています。

2 産業遺産と現代アートの融合事例

「犬島精錬所美術館（岡山県）」

施設概要

瀬戸内海に浮かぶ小さな島、犬島。かつて銅の精錬所として栄えたこの島は、今、現代アートの島として新たな輝きを放っています。その中心となるのが「犬島精錬所美術館」です。「犬島精錬所美術館」は、明治期に建設され、わずか10年で操業停止となった銅精錬所の遺構を保存・再生した美術館です。当時、銅精錬所は、都市部の大気汚染を軽減し、原料輸送を容易にするために、島に建設されることが多く、犬島精錬所もその一つでした。100年の時を経てなお良好な状態で残る煙突やカラミ煉瓦造りの工場跡は、日本の近代化・工業化を物語る貴重な歴史資料であり、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

産業遺産と現代建築の融合

犬島精錬所美術館の建築は、単にアート作品を展示する箱としての役割にとどまらず、それ自体が作品の一部となっています。建築家の三分一氏は、既存の煙突やカラミ煉瓦を、デザイン要素としてだけでなく、機能的に建築に組み込むことで、産業遺産と現代建築の融合を実現しました。

銅の精錬過程で生じる副産物である鉱滓（こうさい）である鰕（カラミ）は、かつては産業廃棄物として扱われていましたが、犬島精錬所美術館では、このカラミを煉瓦に加工し、建物の内外装に利用しています。カラミ煉瓦は、独特の黒光りした色合いと高い蓄熱性が特徴です。また、カラミの蓄熱性ととも、太陽光、地熱、風の流れなどの自然エネルギーを巧みに利用することで、環境への負荷を最小限に抑えた美術館を実現しています。夏は地中での放熱により空気を冷却し、冬は太陽熱による採暖を行う構造により、館内の温度を一定に保っています。

このように、犬島精錬所美術館は、産業遺産と現代建築が融合し、他に類を見ない独特の空間を創り出しています。歴史と現代、自然と人工、破壊と再生といった、様々な対比が織りなす空間は、訪れる人に深い感動と新たな発見をもたらしてくれます。

自然と共生する美術館

犬島精錬所美術館は、環境保全にも積極的に取り組んでいます。前述した自然エネルギーの活用やカラミ煉瓦の利用に加え、植物の力を利用した高度な水質浄化システムを導入しています。このシステムは、美術館の排水やトイレの排水を浄化し、植物園の灌漑に利用することで、水資源の有効活用にも貢献しています。具体的には、トイレの排水は、微生物の働きで浄化され、その水が植物園に供給されます。そして、植物園で育った植物の実、チケットセンターに併設されたカフェの食材として利用されます。このように、犬島精錬所美術館では、自然のサイクルを模倣した、持続可能な水利用システムを構築しています。また、島の環境に合わせた植栽を行うなど、自然環境の保全にも力を入れています。

3 自然を活かしたテーマパーク事例

「ネスタリゾート神戸（兵庫県）」

施設概要

ネスタリゾート神戸は、兵庫県三木市に位置する、甲子園球場約 60 個分の広大な自然環境を有するテーマパークです。この施設は、「大自然の冒険テーマパーク」をコンセプトに、自然と共存しながら、子供から大人まで楽しめる様々なアクティビティを提供しています。

生存本能を呼び覚ます体験

ネスタリゾート神戸のコンセプトである「生存本能を呼び覚ます」とは、日常生活では味わえない、自然の中で自らの能力を試すような体験を提供することを意味します。例えば、ワイルド・バギーでは、オフロードを走行することで、スリルと興奮を味わい、運転技術や判断力を試されます。ワイルド・ハーベストでは、自ら食材を調達し、調理することで、食の大切さや自然の恵みに感謝する気持ちを育むことができます。スカイジャングルでは、高所でのスリルを克服することで、達成感と自信を得ることができます。

これらの体験を通して、参加者は、自然の中で自らの限界に挑戦し、新たな発見や感動を得ることで、心身ともにリフレッシュすることができます。

多彩なアクティビティ

ネスタリゾート神戸では、豊かな自然環境を生かした様々なアクティビティを提供しています。

カテゴリー	アクティビティ	説明
空中冒険	スカイ・イーグル	日本最長・最速のジップライン。
	スカイジャングル	地上 8m からのクイックジャンプやジップラインなど、スリル満点の空中冒険。
水上体験	ワイルド・カヌー	きらめく水面をカヌーで漕ぎ進む。
	キャニオン・ドロップ	巨大な透明球体に入って、緑の丘を転がり落ちる新感覚アクティビティ。
地上冒険	マウンテン・バギー	起伏や傾斜の激しいオフロードをバギーで疾走する。
	キャニオン・スライド	ソリで芝生の斜面を一気に駆け抜ける爽快なスライダー。
その他	ガンバトル・ザ・リアル	仲間と協力して戦うサバイバルゲーム。
	アニマル・フレンズ	タカ、フクロウ、ポニーなど、様々な動物と触れ合える。
	ワイルド・ハーベスト	野菜の収穫や魚のつかみ取り、調理体験などを通して、食の大切さを学ぶ。
	ネスタイルミナ	関西最大級のイルミネーション。

4 現代アートによる土地の記憶の可視化事例

「南三陸 311 メモリアル（宮城県）」

施設概要

宮城県南三陸町に 2022 年 10 月に開館した「南三陸 311 メモリアル」は、東日本大震災の経験と教訓を後世に伝えるために設立された震災伝承施設です。来館者は 2 年で 23 万人を超え、満足度 93.4% の高い評価を得ています。

建物は建築家・隈研吾氏によって設計され、木材を多用した特徴的な建物は「海と山、過去と未来を繋ぐ船」をイメージしています。館内は、展示ギャラリーやアートゾーンのほか、「あの日、自分ならどう判断し行動するか」と投げかけるプログラムなど多様なコンテンツを備えています。

中でも、アートゾーンに展示されているフランスを代表する現代美術家、クリスチャン・ボルタンスキー（1944-2021）の作品「MEMORIAL」は、現代アートを通じて土地の記憶を引き出し、震災の教訓を未来へと繋ぐ、新たな試みとして注目されています。

クリスチャン・ボルタンスキー「MEMORIAL」

ボルタンスキーは、作品を制作する際にその場所の歴史や文化、人々の記憶を重視してきました。「MEMORIAL」もまた、震災直後の被災地で津波の被害を目の当たりにした経験から、震災の記憶を物質化し、後世に伝えるとともに、鑑賞者に「生と死」について深く考えさせることを意図した作品です。

静寂と緊張感に満ちた暗い展示室の中に、南三陸町の板金工場で制作された 1050 個の錆びたビスケット缶が積み上げられています。無数の錆びた缶は、その一つ一つが震災で失われた一人ひとりの命を表すと同時に、時間の経過とともに風化していく記憶を象徴しているといえます。それが南三陸町という震災の記憶が刻まれた場所に設置されることで、その土地の文脈と深く結びつき、鑑賞者自身の記憶や感情と共鳴し、喪失感、無力感、そして生命の尊さなど、様々な感情を引き出します。

現代アートによる土地の歴史や文化への理解・継承の促進

「MEMORIAL」に見られるように、現代アートは言葉では表現しきれない感情や記憶を、視覚的に、あるいは体感的に伝えることができます。特に空間全体を作品として捉えるインスタレーションは、その土地の記憶を可視化し、鑑賞者の五感を刺激し体感させることで、様々な感情や思考を喚起し、土地の歴史や文化への理解を深め、継承していくために効果的な手法と考えられます。またアートは、見る人によって解釈が異なるため、多様な視点から土地を捉え直すことができ、人々の対話を促し、記憶の共有や継承を促進することができます。